

# 「被災地」〈と〉生きる —発災12年が経過した宮城県石巻市でのフィールドワークから—

鈴木 洋太郎 \*

Yotaro SUZUKI\*

Living “with” the Places Called Disaster-affected Areas:  
Through the Fieldwork in Ishinomaki City, Miyagi Prefecture,  
12 Years After the Great East Japan Earthquake

## 要旨

本研究は、宮城県石巻市の住民への聞き取りとドリーン・マッサーの空間／場所論をもとに、「被災地」に対する固定観念を打破し、「被災地」を、出会いと応答の絶え間ないプロセスのなかでつねに構成され続けているものとして捉え直す。一般に、石巻市は東日本大震災の発災後、住民が絶え間ない悲しみや苦しみを経験した、ほかの地域とは明確に異なる「被災地」として捉えられてきた。このような見方は、所与に境界付けられた「容器」のようなものとして空間を捉え、「被災地」という空間には一様に悲嘆や悲惨さが充満しているとする前提に基づいている。私が聞き取りをおこなった石巻市の住民には、こうした固定観念的な石巻市に対する見方にに対して、違和感や葛藤を抱いている人びとが見られた。このような見方は、当該地域の多様さや複雑さを無視し、「被災地」らしくない側面をそぎ落とすからである。石巻市の住民への聞き取りから、「被災地」という場所が、石巻市とその外部の人びとや東日本大震災の死者を含む人間ならざるものとの相互諸関係による産物であり、つねに変化し揺らいでいること、そして従来の被災地説が描定する内部と外部の境界が不安定化されるべきものであることが明らかになった。本研究は、私たちが「被災地」〈を〉従来のように一面的に表象したり、何らかの基準で定義したりするのではなく、「被災地」〈と〉いかに付き合うのかを考えることの重要性を示している。

## Abstract

This study aims to break the stereotypical view of and provide an alternative perspective of “disaster-affected areas”, based on interviews conducted with residents of Ishinomaki City, Miyagi Prefecture, Japan. In general, this area has been viewed in two ways: 1) by separating the area from the rest of the space on the map; and 2) by assuming that residents of this area must have experienced constant grief and suffering after the Great East Japan Earthquake. These viewpoints are generally taken for granted based on the presumption that space is a type of “container” whose boundaries have already determined. In this regard, some of the residents I interviewed expressed discomfort with these stereotypical viewpoints, because such perspectives ignore the diversity and complexity of the region. In order to overcome this conventional one-dimensional representation, I argue that “disaster-affected areas” should be imagined as the places that are tentatively constituted through the processes of encounter and response. In other words, such places should be released from the modern, territorial conceptualization of space. After conducting a series of interviews with residents of Ishinomaki City, I clarified three characteristics of the places called the “disaster-affected areas”: 1) these places are products of the interrelations between those living in Ishinomaki and those who live outside the city; 2) the humans and non-humans implicated in these places are constantly changing; 3) those who died due to the Great East Japan Earthquake are integral members of the construction and practices of the places. These findings imply that we should consider how to get along well with the places stereotypically represented as “disaster-affected areas,” rather than focusing on defining what the places are, because it is not possible to separate “the inside” of the places from “the outside.” Instead, it is important that one must be someone who lives “with” the places.

## I はじめに

### 1 問題の所在

#### (1) 研究の背景

2024年1月1日能登半島で発生した地震や津波の報道にふれ、約13年前の東日本大震災を思い起こした人も多いのではないだろうか。そこで改めて問いたい。東日本大震災の「被災地」とは何だろうか、そしてどこだろうか。たとえば東日本大震災で被害を受けた中小企業・小規模事業者を対象とする「東日本

大震災復興緊急保証」は、原則「特定被災区域<sup>1</sup>」に指定された地方公共団体内の企業や事業者をその支援対象とする。それを踏まえ、特定被災区域に指定された計222市町村こそが「被災地」だと見ることもできよう。しかし区域指定された市町村のリストには、茨城・栃木・埼玉・千葉各県の計87市町村や新潟・長野両県の市町村も並ぶ。これら市町村は、私たち<sup>2</sup>が「被災地」という名辞とともに想像するものだろうか。逆に秋田・山形両県の市町村は、特定被災区域には1市町村も指定されていない。東北地方日本海側は「被災地」ではないのだろうか。

私は特定被災区域の指定の仕方が不適切だ、と言いたいわけではない。災害に対処するため、取り敢えずの区切りを設け、その内側ヘリソースを集中的に投じることは極めて合理的な発想だ。私が乗り越えたいのは、日本地図の上に何らかの線を引いて、その線の内側すべてが「被災地」である、そのように有界化できる空間／場所としてつねに「被災地」をまなざすこと。そうしたまなざし 자체を問題化する。

現在日本で採用されている地方自治制度下では、政策的に○○市は「被災地」、△△市は「被災地」ではない、そのように便宜的に切り分けざるを得ない。しかし仮に政策的にそう設定されたとして、そのような設定が「被災地」の定義として必要十分であり、落ち度のないものであり得るだろうか。○○市の領域の内部には、あまねく均質に何らかの「被災地」らしいものが広がっているのだろうか。「○○市民」＝「被災者」なのだろうか。△△市の市域には「被災地」らしいものは皆無なのだろうか。「△△市民」≠「被災者」なのだろうか。

「被災地」とはそのように単純化できるものではない。しかし現実に、境界線によって明確に他と切り分けられ、その境界線の内部は一様で均質なものだという、そうした問題含みの「被災地」へのまなざしが広く流通している。そのような問題含みのまなざしでしか「被災地」は想定されてこなかった、とまで言つても過言ではないかもしれない。櫛引(2012)は東日本大震災の発災直後に地理学の立場から十分な貢献がなされなかつた結果、マス・メディアを通じて「被災」「被災地」という概念が十分に検討されぬまま拡散され、多くの混乱を招いたことを指摘した。私もこの櫛引(2012)の問題提起には全面的に賛同する。

しかし櫛引(2012)が言う「地理学の立場からの貢献」が多様な情報の地図化に留まっている点には物足りなさを感じざるを得ない。本研究が相対化しようとしている「被災地」概念は、先述のとおり地図の上に線を引き、その線の内側が「被災地」である、そのように定義できる空間／場所として「被災地」を捉える視点だ。地図化への拘泥は、かえって櫛引(2012)が問題視する混乱に地理学が荷担してしまう危険性、すなわち問題含みの「被災地」へのまなざしに地理学が権威としてお墨付きを与え、従来の「被災地」へのまなざしそが唯一絶対であるという方向へミスリードしてしまう危険性と隣り合わせである<sup>4</sup>。

東日本大震災の「被災地」を取り上げる諸研究には、たとえば岩手・宮城・福島3県の領域を示す地図をベースマップとした主題図が掲載されることがある。こうした地図化には次の2つの危険性が付隨

する。1点目は、暗黙のうちに岩手・宮城・福島3県こそが「被災地」と語られるべき領域であつてそれ以外にはないのだ、と読者が誤認してしまう危険性である。2点目は、県境によって閉鎖された岩手・宮城・福島3県36,342km<sup>2</sup>の領土の内側には、「被災地」として分析するのに相応しい、何らかの「被災地らしさ」が均質に一様に広がっていると読者が理解してしまう危険性だ。

こうした危険性に対し、人文地理学的研究はどこまで自覚的であつただろうか。

東日本大震災を扱った人文地理学的研究は、①東日本大震災の被害そのものを取り上げた研究、②東日本大震災からの復旧・復興のプロセスを扱った研究、③東日本大震災の経験をもとに来る災害に向け求められる行動を検討した研究、に大別できる。そのなかでも②復旧・復興のプロセスを扱った研究は、特定の市区町村を事例に分析が展開される傾向がある。たとえば、岩手県山田町(岩間ほか, 2012, 阿部ほか, 2021, 駒木ほか, 2021), 釜石市(岩動, 2021), 陸前高田市(矢ヶ崎・吉次, 2014), 宮城県気仙沼市(矢ヶ崎, 2017, 2019, 2021), 登米市(新沼・宮澤, 2012), 南三陸町(新沼・宮澤, 2012), 女川町(岩動, 2021), 石巻市(関根, 2018; 山田, 2018), 七ヶ浜町(高野, 2021), 福島県楢葉町(梶田, 2016), いわき市(佐々木ほか, 2018)といった市町村が取り上げられてきた<sup>5</sup>。それぞれの研究者たちが「被災地」と考える市町村を取り上げ、その市町村の地域コミュニティ、人口動態、住宅再建状況、産業、医療サービスなどを「被災地」という視角から記述している。こうした研究のなかで各市町村は「被災地」と自明視され、分析対象としての1つの実体を伴い、境界線で閉じられ、内的な一貫性を持つ「被災地」という空間として扱われてきた。そこに見られるのは、本研究が問題視する「被災地」へのまなざしそのものである。各研究が提示する地図や扱う事例は、研究者が当該研究を遂行するために恣意的に設定したものに過ぎないだろう。しかしそれらが累積したとき、皮肉にも人文地理学という権威を持つ学問の力によって、本来多様であるはずの「被災地」へのまなざしの、その多様さが隠蔽され消去されてしまう可能性があるのではないか。

そのような事態を回避するために、これまで実体的なものと自明視されてきた「被災地」という空間／場所を問い合わせ直し、オルタナティブな視座を提示することが必要だ。本研究ではこうした問題含みの「被災地」へのまなざしの源泉を、西洋近代において育まれてきた空間概念に求めている。手始めに、これ

まで人文地理学が「空間」(space)をどのように扱ってきたのか概観していきたい。

## (2) 空間論の展開

18世紀後半から19世紀前半にかけ、近代地理学は徐々に近代的な学問として整備されてきた。その過程において「歴史学は時間に即した記述であり地理学は空間に即した記述」(カント, 2001: 21)であり、「はつきりと二つの立場——時という観点から現象間の関連を研究する立場と、所という観点からそれらの関連を研究する立場——を区別する必要がある」(ハーツホーン, 1957: 203)という姿勢が確立されていった。

時間／空間という二元論に加え、普遍(一般)／個別(特殊)という二元論もまた地理学のなかで繰り返し問われてきた(松尾, 2014)。1930, 40年代には地域の個性の記述をめざす地誌学(地域地理学)が「一般を追求しない非科学的行為」(松尾, 2014)と批判された。それを受け1950年代後半から、均質・均等で等方向的な「空間」に関する法則定立的科学(遠城・大城, 1998: 3)として地理学を位置づける動きが生まれた。これを計量革命と呼ぶ。計量地理学が想定する空間は、基本的に絶対空間<sup>6</sup>に基づく客観的空間であり、人間からまったく切り離して空間を取り上げる(野澤, 2005: 161-162)姿勢が次第に批判されるようになる<sup>7</sup>。こうした動きのなかでマルクス主義地理学と人文主義地理学という、2つの立場が形成されていった。それぞれ簡単に整理する。

マルクス主義地理学は、空間を所与として扱うのではなく(遠城・大城, 1998: 3), 「資本主義のもとで空間はどのように形成され、社会の生産に対していかなる役割を果たしているのか」(松尾, 2014)を探求した。一方人文主義地理学は、人々の感性と結び付き、意味の詰まった空間である「場所(place)の生き生きとした記述」を目指した(野澤, 2005: 163)。両者は異なる立場とはいえ、それらにはともに1950年代の地理学が、法則定立的な近代科学として自らを確立しようとしたことの残滓が息づいていた。そもそも近代科学は人間にとつての普遍的な価値の物語である「大きな物語」(リオタール, 1986: 8, 222 強調は原文)に根本的に規定されて存在してきた。普遍的な価値への到達こそ是とする進歩主義に立脚したマルクス主義地理学も、場所の本質や普遍的「眞実」の解明を志向する人文主義地理学も、「大きな物語」への志向性を完全には払拭できなかった(松尾, 2015)。

1980年代後半以降「大きな物語」から離陸し、近代主義を相対化する動きが加速する。そこでは「近代」の所産としての学知に深く刻まれた「近代」の痕跡が徹底して暴かれた(大城ほか, 1993)。このポストモダニズムと呼ばれる潮流は、大城ほか(1993)の整理によると次の3点の影響を人文地理学にもたらした。  
①時間性の重視と空間性の軽視・等閑視への批判  
②「差異」や「他者性・他なるもの」への関心を取り戻そうとする傾向  
③「書く」という行為そのものや地理学的「知」の対象化、「知」と権力の関係の問題化だ。

本研究が依拠するマッキーによる一連の研究も、そうした潮流のなかに位置づけ得る。マッキー(2000: 270)はリオタール(1986)を引用し「ここでの議論では、その土台との関係ですべての社会変化が究極的に説明され、それと比較して他の因果構造は副次的であるとするような、唯一の／最も根本的な／とくに特権化された説明の軸を想定するような見方を拒否している」と自らの態度を表明する。まず彼女は資本主義社会の産業立地研究に取り組み、「1つの地理的变化が、もう1つの地理的变化を作り出す」という、あたかも純粋に空間的現象であるかのように雇用の空間的分布は捉えられるべきではなく、その基礎にある社会的構造とそれをもたらす社会的プロセスの点からもその分布は概念化できると主張した(マッキー, 2000: 12, 59)。数量化が可能で、一定の法則によってあらゆる空間が説明可能なものとして空間を捉えることを批判する姿勢は『空間のために』にも引き継がれ、「空間と場所の原則などない」(マッキー, 2014: 305)と彼女は何度も主張する。

もう一つ彼女の立場を特徴づけるのが「A／非=A」という古典的形態をとる二元論(マッキー, 1997: 125)の徹底した否定である。そこにはフェミニズムの影響、とりわけ、女性の学としてのフェミニズム<sup>8</sup>を脱構築する嘗為(森, 2021: 146)を通じ、近代科学が前提としてきた「大きな物語」を搖さぶろうとするポストモダン・フェミニズムの思想<sup>9</sup>が見て取れる。マッキー(1997: 129)は、時間／非=時間(空間)という古い二元論の枠内で空間的地位の引き上げを主張したのではなく、その構造を保持したまま時間／空間を定式化すること自体を問題にした。そうすることで法則定立や決定因を拒否し(森, 2014: 395), 「空間」に関する支配的な想像力(マッキー, 2014: 39)を徹底的に相対化してみせる。

### (3) 場所論の展開

抽象的で普遍的で等質的な「空間」に対置するものとしての「場所」(place)（遠城・大城, 1998: 4）という二元論もまた、地理学において長く語られてきた。本研究が依拠するマッサー（2014: 345, 347）は、「空間と場所とを執拗に対立させる」ことを「問題をはらんだ地理的想像力に支えられたもの」として否定する。ここでは空間／場所の二元論の創出から相対化までにいたる人文地理学の場所の議論を、簡単に跡付けてみたい。

計量革命に対する批判のなかで登場した人文主義地理学が、場所をめぐる議論を新たに提起した（熊谷, 2019: 27）。人間にとって「自らの存在を確立し可能性を現実のものとするための基礎」（レルフ, 1999: 109）として場所が概念化され、空間と比べ具体的で、安定性を備え、静的なもの（トゥアン, 1993: 17）と捉えられた。その視座は、人間の体験にとってすでに構成されてしまっている所与の基盤（遠城, 1998: 229）として場所を捉える本質主義的なものであった。

法則定立的科学を志向するマルクス主義地理学は、主観的世界への傾倒と構造的要因の軽視（熊谷, 2019: 35）という点から、人文主義地理学の場所概念を批判した。空間を社会的に生産されるものと考えるマルクス主義地理学者ハーヴェイは、境界づけられた実体ないし「永続性」を場所の重要な性質と考え、「永続性」を切り出し、独特で固有の意味を持った諸実体を人間が構築し維持し解体する過程を、場所と捉えた（ハーヴェイ, 2013: 344, 345, 445）<sup>10</sup>。

フェミニズム地理学の立場からも人文主義地理学者の場所概念に異議が唱えられた。「人間の性質、能力、欲求という一般的な問題に焦点を合わせ」（トゥアン, 1993: 17）空間と場所について思考するという人文主義地理学の表明に対し、ローズ（2001: 78）は「人文主義地理学者にとって、人間とは現実には男性である」と述べ、その「人間」の範疇から女性が疎外されていることを批判した。さらに科学をも真理の制度として絶対化しない徹底した近代知への反省（坂本, 2000）に立脚するポストモダニズムの影響を受けたポストモダン・フェミニズム地理学からは、一歩進んで人文主義地理学、マルクス主義地理学双方が持つ法則定立の追究を目的とする視座に批判が向けられた。たとえばマッサー（2002 強調は原文）は、ハーヴェイ（1999）を念頭に「わたしたちが語っているのはどのポストモダニティの条件なのか——だれのポストモダニティの条件なのか——」と述べ、私たちはどこでもない場所（nowhere）やどこ

にでもある場所（everywhere）ではなく、どこかある場所（somewhere）（熊谷, 2019: 36）について議論したり、どこかある場所から発言したりすることしかできないのだという立場を示した。

そのような視角からマッサー（2002）は、場所のオルタナティブな解釈<sup>11</sup>を提示する。『空間のために』で彼女はその解釈をさらに進め、「場所についての特別なこととはまさに、〈ともに投げ込まれていること〉（thrown togetherness）」（マッサー, 2014: 267）だと述べる。この概念の詳細な検討はIV章1節に譲るが、彼女の主張の力点は場所そのものの概念化というよりも、人間ならざるものも含む他者と「どのようにしてわれわれはとともに生きるのか」（同: 290）、どのように「場所を実践する」（the practicing of place）（Massey, 2005: 154=マッサー, 2014: 289）のかを問うという点にあるように思われる<sup>12</sup>。

### (4) 地理的表象の危機をふまえて

先ほどから述べてきた「ポストモダン」とも呼ばれる潮流は、大城ほか（1993）らによって日本の地理学に紹介されてきた。大城ほか（1993）は3点にわけてその動向を整理しているが、その3番目の論点（「書く」という行為そのものや地理学的「知」の対象化、「知」と権力の関係の問題化）について取り上げたい。たとえば、加藤（1999）は「地理学者が実践する研究・著述（workings）という行為にまつわる著者性・権威性（authority），および研究者の依存する状況やコンテクストの偶有性を意識的に明確化・問題化する『態度』として、その重要性を指摘する。それにもかかわらず日本の人文地理学界においては一部の論者を除き、こうした態度は忌避されるような傾向がある（杉江, 2021）。

科学における「書く」という営為を大きく揺るがすこの議論と真正面から向き合ってきたのは、フィールドワークとエスノグラフィーをその根幹にする人類学であった。クリフォード・マーカス（1996）に代表される「表象の危機」の議論は人類学の既存の方法論を直撃し、フィールドワークとエスノグラフィーを支える表象の政治力学、権力作用が暴露され、調査者が認識論的な超越者であるかのような視点から調査をし、エスノグラフィーを書くことが厳しく批判された（松田, 2003）。

その議論に照らせば、フィールドワークに依拠して特定の地域を表象する人文地理学者はもちろん、あらゆる研究者が「地理的表象の危機」としてその政治性が問われ（森, 2011: 113）るべきであり、人

類学における「対岸の火事」(杉江, 2021)として看過されるべきではない。われわれは「真空状態からではなく、社会によって与えられた特定の『位置／立場』(position)から見る、そして書く」(藤田・北村, 2013: 34)ことしかできないということに自覚的であらねばならない。

私はⅡ章2節において本研究が依拠するフィールドワークの過程を子細に記述する。それはフィールドワークにおいてどのようにフィールドに「はいる」のか、フィールドワーカーが何者としてふるまうのかということが、調査を大きく規定(岸・石岡・丸山, 2016: 112)し、調査結果を搖るがすためだ。加えて本研究における私の存在を不可視化させないことで、引用した語りだけが切り取られ、それらが石巻の人びとの「ありのままの姿」だ、石巻の人びとを代表する「声」である、そうに読まれることを防ぐことも意図している。

本研究で引用した語りやそれにもとづく考察は、私の存在と不可分であり、本研究の記述者たる私の立場は代替可能なもの、透明化可能なものではあり得ない。そして引用した語りの数々は、まさに当該研究のために当該研究者に対して発せられたもの(成瀬ほか, 2007)に過ぎない。本研究があくまで「部分的真実」(クリフォード・マーカス, 1996: 12)として、引用した語りの背景にあるその構築性や状況依存性を念頭に、つねに批判的に読まれることを期待する。

## 2 研究の目的

本研究の目的は、境界線によって明確に他と切り分けられ、その境界線の内部は一様で均質な「被災地らしい」何かがあまねく広がっている、そのような問題含みの「被災地」へのまなざしを相対化し、宮城県石巻市でのフィールドワークを通じて出会った人びとの語りをもとにオルタナティブな「被災地」への視座を提示することである。

私はジャッカリー・ミンカ(2013)が「地中海」を取り上げて主張したのと全く同様に、「被災地」は決して所与の空間ではないし、境界線で明確に他と区切ることができるるものでもないし、内部がすべて均質なものでもない、そのようなものとして「被災地」を捉える。そのために、マッシー(2014)が主張する空間／場所概念を参照する。先に簡単に記述したように、ポストモダニズムの潮流の中で、彼女は空間や場所を流動的で、複雑で、開放的なものと捉えている。その視座はHenderson(2009: 540-541)でも

紙幅を割いて紹介され、日本においてもたとえば原口(2012)、熊谷(2013)、成瀬(2014)らがマッシー(2002)を、佐藤(2019)、久島(2019)、熊谷(2019)、中島(2022)、中島(2023)らがマッシー(2014)を引用するなど、既に広く受容されている。

マッシー(2014)に依拠して「被災地」を語ることの意義は以下の点にある。第一に人文主義地理学の場所を所与の基盤とする見方や、ハーヴェイ(2013)のマクロに、実体的に場所を捉える(熊谷, 2019: 42)見方では、従来の「被災地」への視座を相対化するどころか強化してしまう可能性がある。第二に、東日本大震災からの復興過程は近代科学的発想に規定されてきた。近代的な発想にもとづき有界化された「被災地」という空間の内部に、大量の資本が投下され、大規模な復旧・復興事業が展開されている。宮城県南三陸町でフィールドワークを行う内尾(2018: 152, 154)は科学的な見地からの説明や専門知識が権威的に活用され、ハード先行の防災計画に対し地域住民が反対の声をあげにくい状況が生まれたことを指摘する。権威としての近代科学が「被災地」を成立させ、構築してきたとも言え、それを相対化し、脱構築するには近代科学という枠組みそのものを批判的に捉える必要がある。

本研究が批判する、境界線によって明確に他と切り分けられ、その境界線の内部を均質なものと想像する「被災地」へのまなざしは、Ⅰ章1節で地図を取り上げて説明したように「上から」マクロに実体的に「被災地」を捉えるものである。一方でフィールドワークに依拠する本研究は、一人ひとりの語りという徹底してミクロな視点から「被災地」と向き合っていく。こうした方法論によって災害を捉えるとき、「災害は自然現象というよりも、むしろ人間の経験として観察される」(内尾, 2018: ii)。マクロな視点では捨象されてしまう一人ひとりの経験をつぶさに見ていくことで、「被災地」がいかに流動的で、複雑で、一貫性を想定できないものが実感を伴って理解できることだろう。

ゆえに本研究は決して「被災地」一般を論ずるものではない。あくまで従来の支配的な「被災地」へのまなざしの問題点を指摘するとともにそれ相対化し、オルタナティブな1つの視座を提示するものだ。「被災地」とはこういう空間／場所だと一義的に、包括的に記述することは「空間と場所の原則などない」(マッシー, 2014: 305)という姿勢に反する。あわせて石巻市でのフィールドワークを通じ「被災地」一般を論じようすることは、私が批判してきた従来の人文地理学的な研究と同じ轍を踏むことになってし

まう。「被災地」とは、一般的に論じられるほど単純な何かではないはずだ。

最後に「震災」、「被災」、「被災地」、「被災者」という言葉の表記について説明しておく。本研究は繰り返し述べてきたように「被災地」という概念の社会的構築性を指摘し、それを相対化することを大きな目的としている。震災、被災、被災地、被災者という語で指し示される内容は、その語が用いられる文脈に応じて常に揺らいでおり、アприオリに扱うことは不適切である。そのような視角に立つ以上、これらは本来括弧つきで表現されるべき語句だ。ただし、以下でそうした表記を繰り返すことは煩雑になるため、特に強調する場合を除き括弧は省略して記述することとする。

## II 対象地域と調査方法

### 1 対象地域

#### (1) 石巻市と東日本大震災

本研究は宮城県石巻市（人口134,919人、面積554.55平方キロメートル、いずれも2023年11月末現在<sup>13)</sup>）で行ったフィールドワークに依拠する。なお、石巻市は2005年4月1日、近隣の6町（桃生郡河北町・同郡雄勝町・同郡河南町・同郡桃生町・同郡北上町・牡鹿郡牡鹿町）と合併し、その市域を4倍以上に拡大した。以下「石巻市」と記述する場合、特に断りがない限り2005年合併以後の石巻市を表すものとする。

旧北上川河口部の沖積平野を中心市街地を有する石巻市にとって、2011年3月11日14時46分に発生した東北地方太平洋沖地震（石巻市では震度6強を観測）およびそれに伴う津波がもたらした被害は甚大なものであった。2023年9月末現在3,118名の死者数と414名の行方不明者数が市によって確定されている<sup>14)</sup>。この数字は、市町村単位では最大であり、これをもって東日本大震災の「最大被災地」とされることがある。

石巻市内では、被災前に存在した全住家数の76.6%もの住家が被災した<sup>15)</sup>。2011年3月17日には最大となる50,758人が避難所に身を寄せ、これは2010年9月末現在の石巻市の人口163,216人の約31%にあたる<sup>16)</sup>。こうした被害を前に、ピーク時には応急仮設住宅に7,102戸（2012年6月）、民間賃貸住宅を借り上げたみなし仮設住宅に5,899戸（2012年3月）の合計13,001戸に32,270人が居住した（一般社団法人日本家

政学会東日本大震災生活研究プロジェクト石巻専修大学復興共生プロジェクト、2016: 16）。その後復興公営住宅の整備が進み（市内で計4,456戸）、2020年度中に全ての仮設住宅が解消した<sup>17)</sup>。

2021年3月には、旧北上川河口部に石巻南浜津波復興祈念公園が整備された。この公園は石巻市門脇町、雲雀野町、南浜町の一部の、2012年12月石巻市によって災害危険区域に指定され、防災集団移転促進事業によって集団移転が進められた土地に位置する。発災直前の段階では、公園として整備された範囲に1,124世帯の暮らしがあった（栗生、2021<sup>18)</sup>）。公園内には、みやぎ東日本大震災津波伝承館や石巻市慰靈碑が存在し、隣接して石巻市震災遺構門脇小学校、震災伝承交流施設MEET門脇が建つ。こうした施設が集中的に立地するため、この地域は現在、石巻市における震災学習や防災教育の拠点として国内外から来訪者を集めている。被災地としての石巻を代表する公園となっている<sup>19)</sup>。

国や宮城県が施工した事業を含め、石巻市では2022年度までに1兆2,309億円の復旧・復興事業費が投じられた<sup>20)</sup>。これは発災前の市の一般会計予算の約20年間分に相当する額である。こうした国の復興財源によるハード面の整備が2022年度で完了したことから、2023年11月9日に「石巻市復興事業（基盤整備）完結式典」が開催された<sup>21)</sup>。

発災12年が経過した2023年現在、石巻市における東日本大震災からの復旧・復興事業は既に1つのステージを越えていると言つてもいいだろう。被災の痕跡は、石巻南浜津波復興祈念公園のような土地を除いて目に見えにくくなっている。他方で県外から来た人などに石巻を案内する機会が多いという地元の方は「（牡鹿半島の）海沿いの、中央市街地から離れた場所は、いまも復興の工事は終わってませんし

… ソフト面というところでみると、まだまだ整備が行き届いてないことはたくさんあるんですー、みたいな話は（石巻を案内する際に）よくしますね」とも語っている。

石巻市を事例に東日本大震災の犠牲者が、津波襲来時どのような行動をとっていたかを調査した稀有な研究（三上ほか、2012）がある。この研究は生存者への聞き取りにより「データ」が収集されており、著者らは「調査段階で感じられたことは、津波災害から逃れた方も… 周りの亡くなられた方の状況をよく存じておられることであった。」と述べている。ここに端的に示されるように、石巻の市街地沿岸部では、東北地方太平洋沖地震に伴う約7mの津波<sup>22)</sup>により、生／死が隣り合わせに存在する状況が一時的



第1図 対象地域図（広域）

国土地理院国土基本情報、国土数値情報（鉄道データ）及び  
ESRI ジャパンの全国市区町村界データを利用し著者作成 (c) Esri Japan

に現前した。この経験が石巻には確かに息づいている。発災12年というタイミングではじめて石巻を訪れた私も、折にふれてそれを感じさせられた。

## (2) 石巻市の概要

石巻市は東北地方最大の河川である北上川の河口港、石巻港を中心とする港町を母体として発展してきた。石巻港は江戸廻米の積出港として、近世中期に奥州随一の港に発展し、石巻も伊達藩内で城下町仙台につぐ第二の都市となった（石巻市史編さん委員会, 1998a: 2-3）。明治期に入ると、北上川の流下土砂の堆積に伴う石巻港の機能低下に加え、1890（明治23）年には現在のJR東北本線が石巻のはるか西方を通るルートで開通（石巻市史編さん委員会, 1998b: 157-158）。物流の中心が舟運から鉄道輸送へ移行したことで商業港としての石巻港の衰退が加速した。そのため大正・昭和初期には、石巻の再生策として石巻港に漁港の建設が進められ（石巻市史編さん委

員会, 1998b: 161），以来缶詰などの水産物加工業も発展し（石巻市史編さん委員会, 1998b: 467），漁業や水産加工業は石巻の地域経済を牽引するまでに成長した。石巻市水産物地方卸売市場石巻売場（石巻魚市場）は、「世界で最も長い魚市場」としてギネス世界記録にも認定されている<sup>23</sup>。

1940年に東北振興パルプ株式会社石巻工場が旧北上川河口部で操業を開始してからは製紙業も石巻市の経済を支える基幹産業のひとつとなり（石巻市史編さん委員会, 1996b: 512-514），工業都市としての性格をも有する街となっていく。あわせて石ノ森章太郎氏との縁から石ノ森萬画館を中心に「マンガの街石巻」として観光振興が進められている。

## (3) 門脇町・雲雀野町・南浜町

石巻市門脇町、雲雀野町、南浜町は旧北上川河口部に位置し、石巻市内において特に東日本大震災の津波及び津波火災で甚大な被害を受けたとされる地

区である(第2図)。

石巻市門脇町は、日和山南側及び東側の山裾に位置する。住民の方への聞き取りによれば門脇の歴史は鎌倉時代、日和山に葛西清経が城を設けた際、その家臣たちが日和山の山裾に居住したことに端を発する。近世に石巻港が開かれる際に種々の港湾施設が北上川河口に設置されるなかで町として発展し(石巻市史編さん委員会, 1998a: 80), 「安永期(1772~1781)ごろには門脇町も石巻町に匹敵する規模の町場となった」(石巻市史編さん委員会, 1998a: 100)という。

一方で、門脇町よりもさらに沿岸側に位置するのが雲雀野町、南浜町だ。かつては善海田と呼ばれ、水田や湿地だった(復興庁・宮城県・石巻市, 2015: 12)現在の雲雀野町、南浜町では、明治期以降、微高地に堀河農場(明治33~大正14), 市営競馬場(昭和6~昭和36), 遊郭などが作られる。1935(昭和10)年「南地開発」として市営住宅が建てられ(石巻日日新聞2016年8月1日)<sup>24</sup>, 戦後引き揚げ者などが集住をはじめた。高度経済成長期以降、高密度に住宅が密集する地区となり、石巻文化センター(1986年~)や石巻市立病院(1998年~)といった市の基幹施設も、当地に立地するようになっていった<sup>25</sup>。

## 2 調査方法

私が宮城県石巻市をはじめて訪問したのは2022年9月である。その後、2022年12月から2023年8月まで計82日間現地調査を行い、オンラインでの聞き取りも併用した。フィールドワークの実施にあたっては、「公益社団法人3.11メモリアルネットワーク」(以下「311MN」), 「一般財団法人まちと人と」(以下「まちひと」)という石巻を拠点として活動する2団体にお世話になった。

「311MN」には東京大学の小田隆史先生の紹介で接点を得た。紹介をうけるにあたり、石巻南浜津波復興祈念公園に関する修士論文を書きたいと伝えていたため、専務理事の中川政治さんが同公園に関する事業に私が関わるよう取り計ってくれ、様々な資料の提供も受けた。さらに誰に聞き取りをすべきか提案してくれたり、ときには聞き取りのアポイントメントまでとってくれたりしたこともあった。フィールドワーク中にお話をうかがった46名のうち、34名が「311MN」での活動等を通じて出会った方々であり、本研究は「311MN」の人脈や地域における関係性に大きな影響を受けている。

「311MN」は、2011年4月2日に設立された「石巻災害復興支援協議会」<sup>26</sup>をその起源とする。石巻へ災

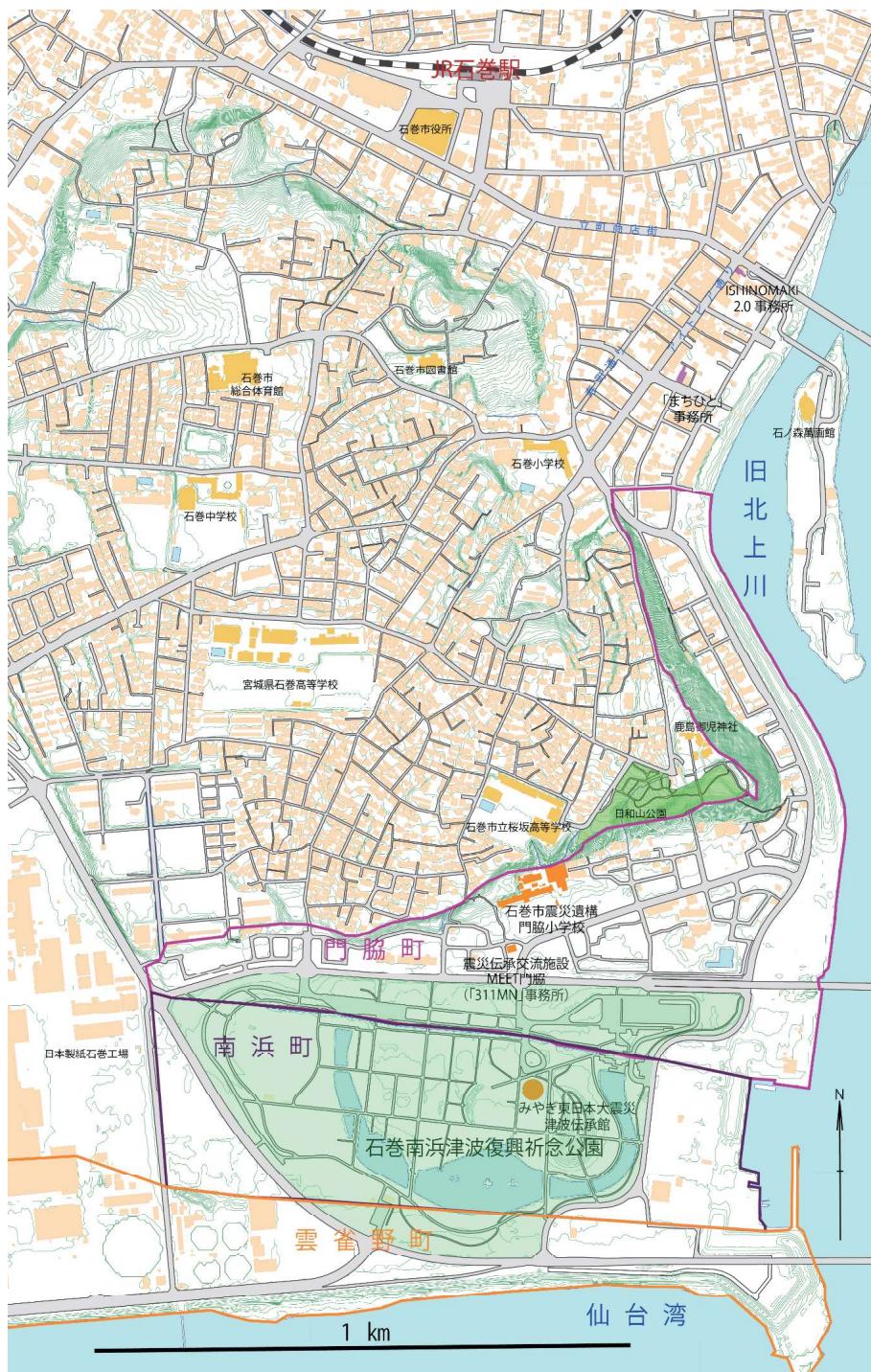
害支援に駆け付けたNGOやNPO、344団体間の調整の場づくりを行った、「奇跡のボランティア集団」とも呼ばれた存在だ(中原2011: 4)。発災からの時間の経過とともに、「震災支援の連携から、震災伝承の連携へ」(公益社団法人みらいサポート石巻報告書作成チーム, 2016: 31)と掲げ、次第に活動の軸足を震災伝承、防災・減災活動へと移している。

本研究の実施にあたっては、「311MN」が企画・運営を行う語り部講話等の運営手伝いをした後で、その語り部さんに対し、本研究のために個別に聞き取りをするという形態をとることが多かった。「311MN」のベストを着て、スタッフのみなさんと行動をともにしていたし、「311MN」のロゴの入った名刺を、京大の名刺とあわせて語り部さんなどに渡していた。それゆえ私も、「311MN」の一時的な成員、すなわち震災伝承や防災教育に関心をもってインターンシップに来ている学生として語り手からまなざされていた感じる。たとえば、「ローリングストックじゃないけど、腐らない食料やカセットポンベ、ラジオなどをちゃんと備えておいてね」とか、こういうときはこういうところに避難するんだよ、などと聞き取りに際して、私から問わずとも力強く語ってくださる経験をした。

「311MN」のインターン生として、週3~4日程度団体の業務に関わっていた。石巻南浜津波復興祈念公園の整備に関する会議や、震災伝承活動に関する研修会、シンポジウムなどにも参加した。業務とはいえば学びになることばかりであり、震災伝承活動に携わる人びとが、どのように震災を次世代に語り継ごうとしているのか、何を課題だと感じているのかを知ることができた<sup>27</sup>。また事務所で交わされる何気ない会話からも、発災12年が経過した石巻における震災、被災との向き合い方の一端を知り得たし、業務中車で移動する時間も長く、それはスタッフの方々とじっくり話ができる貴重な時間だった。

多様な視点から石巻の人びとの声を聞けるよう、友人の伝手をたどり、「まちひと」にも住み込みのインターンシップという形で関わらせてもらうことになった。「まちひと」とは、「一人ひとりの学びと活躍の場を育むことで、まちが豊かになる仕組みをつくる」ことを使命に掲げ、石巻で高校生向けの教育プログラムや、若手社会人や地元企業を対象とした人材育成などに取り組む団体だ。発災直後に石巻の中心市街地で立ち上がった一般社団法人ISHINOMAKI 2.0<sup>28</sup>の教育事業を母体とし、2022年に新法人として発足した。

「まちひと」はその業務の性格上、市内の企業や学



第2図 対象地域図（詳細）

国土地理院基盤地図情報を利用し著者作成 等高線は1m以上15m以下まで1m毎表示

第1表 5人の語り手たち

語り手	それぞれの経験と私が会った経緯
カオリさん	発災の13年前に石巻市門脇町に引っ越し。発災当日は門脇小学校から日和山に避難する途上で津波に遭遇。石巻南浜津波復興祈念公園参加型運営協議会の場で知り合い、以後複数回聞き取りを実施。
ツトムさん	発災時石巻市雲雀野町在住。発災後は震災伝承活動に精力的に取り組んでいる。「311MN」が主催する語り部講話の手伝いをしたのち、講師役のツトムさんに聞き取りを実施した。
ハルカさん	石巻市の市街地出身で、現在は首都圏の大学に進学(発災当時小3)。自宅が津波で流失し、内陸部に再建。石巻圏域移住体験ツアーではじめて出会い、「まちひと」でも一緒に活動した。
ミサキさん	発災当時石巻市立門脇小学校1年生。大学では東日本大震災の伝承活動や防災教育の推進にも取り組む。「311MN」代表理事の武田真一氏に紹介され知り合った。
メグミさん	「311MN」のスタッフの1人。旧北上川左岸の石巻市湊地区で津波を経験した。「311MN」の広域伝承連携部門の行事等で複数回一緒に業務にあたった。

校、NPOと様々なつながりを持っている。代表理事の齊藤誠太郎さんはそのつながりこそが「まちひと」の一番の財産だと言い、度々そうした石巻で活躍する人びとの食事に私を連れ出してくれた。「石巻がまちとして抱えている課題が、震災を契機にお金も人も入ってきて見えなくなってしまった部分もある。(発災12年が経過して)過疎地・石巻としての課題が再び少しづつ見え始めるようになってきてる」と誠太郎さんは語る。その課題に教育という軸からアプローチするのが「まちひと」である。もちろん「まちひと」を語るうえで震災を欠かすことはできないし、誠太郎さんもまた震災を契機に石巻に移住した人の一人である。それでも誠太郎さんの見つめる石巻は、被災地としての石巻というよりは、一地方都市としての石巻だ。彼のこうした視点もまた、本研究に影響を及ぼしている。

そして「まちひと」には私以外にも住み込みでのインターンシップに参加している学生がいた。冬の寒さと太平洋から吹き付ける強風、そして降雪はもちろん、東北地方とはいえど暑い石巻の夏に苦労しながら、慣れない環境で彼らと私は寝食を共にした。団体の業務に関わるだけでなく、一緒に市内の飲食店に出かけたり、石巻圏域移住体験ツアーや川開き祭り<sup>29</sup>を楽しんだりもした。私同様石巻の外から来た同世代の学生がいたからこそ、知り得た石巻の姿もあったと感じている。

### 3 5人の語り手

Ⅲ章以降は、主に表1に示した5人の語りから議論を進めていく。この5人の語りは、被災地という空間や場所を捉え直し、被災地へのオルタナティブな視点を提示するうえで重要性を持つと私が判断したものである。ただし、このことは後述のように石巻

で聞かれたさまざまな語りに「私」が優劣をつけていいわけではないことを書き添えておく。

加えて引用した語りの数々は「石巻人」を代表してなされた語りではない。聞き取りのなかで、ある語り手は「本人たちっていうか、私なんですけど…」、「逆にこっちの人からして、私からすると…」というように、自身の語りがあくまで語り手個人の思いであることを度々強調していた。長崎で活動する被爆の経験を語り継ぐ語り部への聞き取りを通じ、高山(2016: 48)は爆心地からの距離によって被爆の語りが序列化されるという現実を指摘した。これと類似の構造が石巻にも存在する。家族は無事だったのか、自宅は残ったのか、そうした被災の程度に応じ細分化された、語りの序列がある。大した被害に遭っていない私が何かを語ってよいものか、私が語ることによって誰かを傷つけやしまいかと、それぞれが語り方を工夫したり、そもそも語るのを控えたりしている。こうした現実を前に、一人ひとりの語り手のこうした配慮や逡巡を無視した過度な一般化、カテゴリー化は暴力(岸, 2018: 108)に他ならない。むしろそうした一般化の過程でこぼれ落ちてしまうものを僅かでも掬い取ることこそ、本研究の目指すところである。

他方で、ハルカさんは「別に被災したからって偉いわけじゃないじゃないですか」と、またある「311MN」のスタッフも「震災前まではみんな普通のひとだったのに、被災の度合いの強弱でいま何が変わるもの?」と語る。本研究がある種の「特権化」や「序列化」の再生産に加担せぬよう、私は語り手の「被災の度合い」を議論にあたって最低限必要と思われる範囲に限り記述した。このことをご理解いただきたい。

### III 空間の領土化と被災地・石巻

#### 1 空間の領土化と被災地言説

##### (1) 空間の領土化

近代的な空間概念の下で空間は地表面と同一視されてきた。その地表面は隅々まで領域化され、排他的な領域に分かたれている（高木, 2002: 104-105）。ウェストファリア体制によって成立した「境界画定された権力容器」（ギデンズ, 1999: 142）としての近代国民国家がまさにその例だ。Taylor (1994) がギデンズ (1999: 142) の「境界画定された権力容器」という概念を拡張し、権力 (power), 富 (wealth), 文化 (culture), 社会 (society) の「容器」として19世紀の国民国家を記述したように、伝統的な地理学をはじめとする人文・社会科学もまた、全く同じように空間を脱歴史的に、所与に分割された社会や文化のいわば「容器」（杉江, 2023: 23 強調は原文）として扱ってきた。

17, 18世紀に発明されて以来、近代的な知の基底を成すものとして社会化され、自明視されてきた近代的な空間概念は今日、その亀裂や屈折、ずれや衝突があらわになり、その規定が揺らぎ、問い合わせていくプロセス（吉見, 2002: 46）を経験している。そうした潮流のなかでマッサー（2014: 128）も「容器」としての空間概念を「空間の領土化」(territorialisation of space) と呼び、厳しく批判する。本研究に即して表現すれば、I章1節で用いた例えのような○○市、△△市という特定の「領土」と、被災地という特定の「空間」が分かれ難く結びついた状態、それが「空間の領土化」である。被災地という空間はつねに、またあらかじめ「被災地ではない」空間と境界線を引いて切り分けることが可能であり、境界線の内部にはあまねく一様に「被災地らしい何か」が充溢しているものと想像されている。

##### (2) 被災地言説

地理学における言説分析の傾向を論じた成瀬ほか（2007）は、言説とは「人が言葉を発するときに知らず知らずのうちに他人の言葉、他人の考え方、他人が決めた方向を向いてしまう」力であるとした。一人ひとりに働くそうした力の累積により、いつしか人びとは似たような言葉を使い、似たような考え方をするようになる。サイード（1993: 167）はオリエンタリズムの言説が、断定的で自明のものとして表現されること、そこで用いられる時制は、時間を超越

した永遠であることを明らかにしている。また山崎（2013: 145-146）は、言説の特徴として「真実」についての表現とされる点、誰かが誰かについて語るという主体と客体の構図をとる点の2点を挙げている。

被災地という空間もまた、特定の言説、表象に強く規定されている。被災地とは「つらくて、かわいそうで、悲しくて、悲惨で、悲劇の空間／場所」（以下、被災地を「つらくて、かわいそうで、悲しくて、悲惨で、悲劇の空間／場所」とみなざす言説を「被災地言説」と書く）。東日本大震災の被災地は、この固定的で一面的な被災地言説にきわめて強力に支配されつづけてきた。被災地言説の支配は、被災地の「外側」に住む私たちはもちろん、被災者や遺族、被災地の「内部」<sup>30</sup>に生きる人びとにも確実に及んでいる。

そして、被災地言説が真実味を帯びるだけの物質的な基礎（山崎, 2013: 147）として、各地の津波や地震、原発事故による被害を位置づけることができる。被災地言説を前に、物質的な被災事実は言説を強化し安定化こそすれ、被災地という言葉で語られる、その「内部」の差異を無化している。被災地言説に依拠して被災地をみなざすとき、被災地の「内側」はどこも均質に「つらくて、かわいそうで、悲しくて、悲惨で、悲劇の空間／場所」である。被災地の「内側」の津波や地震、原発事故による被害状況は、実に多様で複雑であるにもかかわらず、それらは近代的な空間概念に支配された被災地という空間を搖るがす「亀裂や屈折、ずれや衝突」（吉見, 2002: 46）として機能できてはいない。

加えて、被災地の「内部」の被災者は、つねに被災地言説の客体としての立場しか与えられてこなかった。被災地言説には、被災地の「外部」の私たちが、被災地の「内部」の被災者について語るという一定の力関係（山崎, 2013: 146）を伴う構造が内包されている。その構造は所与に境界付けられた「容器」としての被災地という空間に支えられ、疑われることなく残存しつづけている。

#### 2 石巻の語られ方

本節では前節で説明した近代的な空間概念（「空間の領土化」）に規定された被災地への視座、強固な被災地言説、それら2つがなぜ相対化され、乗り越えられなければならないのかを、ハルカさんの語りを中心に記述していく。石巻から首都圏の大学に進学したハルカさんは、石巻がつねに被災地言説と結びつけられる形でしか語られないという経験を語ってくれた。従来の視座における被災地の「外部」から注がれる、近代的な空間概念と被災地言説に支配され

た被災地へのまなざしが、石巻で出会った語り手たちに違和感や葛藤をもたらしている現実が明らかになった。

「(大学で) 出身はー? みたいに聞かれて、宮城です!って最初答えるんですけど、… 宮城のどこなのって聞かれて、石巻です、っていうと、えーそうだったんだー、みたいな。なんかもう、割と初手のほうで、そんな感じの反応をされることが多い、(発災) 当時大丈夫だったのー?, おうちはー? みたいな感じで、結構聞いてくれる、聞いてくる方が多いなあっていうふうに思いますね。… みんなこんなに(石巻のことを) 知ってるんだっていうくらい、結構みんな石巻知ってて、知られてること自体はめっちゃ嬉しいー!って、あんなちっちゃいところなのに、あっ知ってくれてるんだーって思ってましたね。… (出身が) 石巻って言ったら、もしかして震災、って思って、相手が若干気をつかったり、相手が、これ(=出身地) 聞かない方がよかったかな、じゃないけど… 逆に相手が気を遣っちゃうから、自分も(変に気を) 遣っちゃう。全然そんな気にしなくていいのに、っていうのと、全然出身聞いてもらっていいんですけどねー、って思ったりしますね。」

「なんかあんまり、被災地感を出したくなくて、… 被災したからって言ったら、まわりの人は、… なんか憐れんでくれるっていうか… 寄り添う感じの声掛けを結構してくれるけど、別にそれを言われて嫌にはならないけど、(その声掛けを) 必要としているわけじゃない、ただ出身石巻って言いたいだけなんだけどなーっていうのがあったり、… 相手も石巻って聞いたからには、あーなんか震災について聞かなきゃって思ってんのか、… 石巻です、って言って、そのまま話(が) フーンで終わるか、震災の話にもってくか、のどっちかのパターンしかなくて、なんか震災の方の話を持ってく人は、なんとなく、あっ当時はお疲れ様でしたーっていう気持ちを表すために、ちょっとでも触れてくれてるんだろうなって思うんですけど、なんかこう、自分からそれ(=被災したということ) を言いたいわけじゃない、… そう(='あっ当時はお疲れ様でしたー') いってもらいたいわけじゃないから…」

ハルカさんは自己紹介の場で、出身地について「宮城です!って最初答える」ことで、石巻出身だと明かすことを回避しようとする。彼女は石巻出身だということを敢えて隠したい訳ではない。そして「結構みんな石巻知ってる」という語りから伺えるように、大学における石巻の知名度の高さを踏まえれば、

宮城というより高次のスケールの地名を持ち出さなければならない必然性もない。しかし「石巻」という地名は、そこに貼り付いた被災地言説とともに聞き手に受け取られることを経験的に予見し、それを避けるためにハルカさんは「宮城出身」と伝えることを選んでいる。

ハルカさんの語り方は、自己紹介の場を無難にやり過ごしやすくするための彼女なりの戦略だ。「自分からそれ(=被災したということ) を言いたいわけじゃない、… そう(='あっ当時はお疲れ様でしたー') いってもらいたいわけじゃない」ハルカさんにとって、石巻という地名を口にすることは大きなリスクとなってしまっている。不必要的モヤモヤに苛まれることを避けるために語り方を工夫せざるをえないほど、石巻という地名に対する還元された理解は根強い。石巻の語られ方は、ハルカさんの言葉を借りれば「そのまま話(が) フーンで終わるか、震災の話にもってくか、のどっちかのパターンしかな」い。大平(2002)が地名が持つカテゴリー化の能力によって、複数の範域が同一視されたり、無数の時間的空間的切片の差異が捨象されたりすることを指摘しているように、石巻という地名がカテゴリーとして機能している様子がうかがえる。

フィールドワーク中に出会ったある男性は「(石巻市の) 内陸部の出身にもかかわらず、出身地の話題になると、『あ、(石巻市出身だということ) を聞いたら、ごめんなさい』みたいな空気感になったりして、自分はたいした被害があったわけでもないのに、(勝手に)『被災者』って一緒に見られるのは葛藤だった」と語る。石巻市は2005年、合併によって旧北上川の河口付近から、より上流側にも市域を拡大した。石巻市が東日本大震災の津波で甚大な被害に遭ったことは否定しえないが、市域全体での浸水面積は13.2%程度<sup>31</sup>である。ハルカさんも石巻における津波の被害を「全然そんなに被害ないです、ってところと、逆にある建物を境に、こっち側は全部なくなってる、みたいなのが結構近い場所で、その差があらわれてい」たと語っている。石巻が語られるとき、こうしたミクロな被災の実情はたいてい捨象されている。

社会に流通する被災地言説が、そのまま石巻の語られ方を枠づけていることが明らかになった。近代的な空間概念、すなわち「脱歴史的に、所与に分割された社会や文化のいわば『容器』」(杉江, 2023: 23 強調は原文) としての空間、その「容器」の内部には均質な社会や文化が充満しているものとしての空間の捉え方に強固に支えられ、被災地言説は今日も流

通しつづけている。私たちが近代的な空間概念とともに被災地という空間をまなざす限り、有界化された被災地という空間のなかには、つねにそして一様に「被災地らしい何か」が充溢していることになる。そこでは空間が有するはずの「空間固有の不安定性や創造性」(マッキー, 2014: 129)が収奪され、被災地言説は一向に不安定化されない。近代的な空間概念においては時間的なものが徹底的に抑圧されているため、発災からの年月の経過も言説を搖さぶる契機として機能していない。だからこそ空間が問題にされなければならないのだ。

#### IV これまでに代わる被災地へのアプローチ ——「被災地」〈と〉生きる

III章では、近代的な空間概念に下支えされた被災地という空間と、それと密接に結びついた被災地言説が、石巻で出会った語り手たちに違和感や葛藤を抱かせていることを明らかにした。被災地言説を問い直し、塗り替えていくためには、近代的な空間概念こそが疑問視されねばならない。そこでIV章ではマッキー (2014: 24) の「これまでに代わる空間へのアプローチ」をたよりに、被災地へのオルタナティブな視点を提示する。

##### 1 新しい空間／場所へのアプローチ

近代科学の「大きな物語」のもとで、たとえば都市と農村、西洋と東洋の間の差異は、質的に全く異なるものとして位置づけられるというよりは、同じ尺度で達成や進歩の度合いが測られ、それぞれ前者から見て後者が「遅れている」ものと扱われてきた(米家, 2012)。マッキーは場所と場所の関係性について、異なる場所には異なる歴史があると認めること、すなわち「〈これまで語られてきた物語の数々〉(stories-so-far) が同時に起こるものとして空間を想像すること」(マッキー, 2014: 24-25)を求める。そこでは空間は、①相互作用を媒介として構成されるものとして、②同時代の複数性という意味における多様性の存在可能性の領域として(同: 24)想像されることになる。それは相互作用があるためには、個々別々の要素からなる多様性が前提にされねばならず、多様性があるためには空間がなければならぬ(同: 111)からだ。そして個々別々の要素が、すでに相互接続した全体を想像<sup>32</sup>するのではなく、そうした要素が相互接続し続けているもの、あるいはいまだしていないもの、さらには決して接続されるこ

とのない潜在的な結びつきがつねに存在するものとして想像される必要がある。そのとき空間は、③つねに構成の過程にあるものとして理解される。①～③が、これまでに代わる空間へのアプローチとしてマッキー (2014: 24) が提示する3つの命題だ。

人びとは自らの意志でそれぞれの身体をある空間に置くのではなく、偶発的に特定の空間に放り込まれ、予期せざる他者との遭遇を通じ都度日常的な空間を作り上げていく(森, 2011: 134-135)。マッキーは「場所についての特別なことはまさに、〈ともに投げ込まれていてのこと〉(throwntogetherness)」(同: 267)だと述べ、場所を、われわれが他者とのつかの間の出会いに対し、何らか応答することで創造される(同: 267, 269)出来事と捉える。ゆえにその視座に立脚するとき、人間ならざるものも含む他者と「どのようにしてわれわれはともに生きるのか」(同: 290)、それがどのよう 「場所を実践する」(the practicing of place) (Massey, 2005: 154=マッキー, 2014: 289 強調は原文)のかが問題になる。

##### 2 「被災地」という場所を実践する

1節で概観したマッキー (2014) の空間／場所理解をふまえ、本節では石巻で出会った語り手たちの語りを「被災地」という場所を実践する」という視点から記述していく。

マッキーはBergson (1910, 1911) を引用しながら、モダニズム的視座のなかで「空間は表象や安定化と同一視され」(マッキー, 2014: 56), 空間が閉鎖的で、固定的で、静的なものへと還元されてきたことを追究する。「空間は、時間と同じように代理=表象することは不可能である」とマッキー (2014: 97) は書いている。特定の言説や表象と結び付くことで永遠化、無時間化された「被災地」という空間」を指定することは、空間が本来有する偶然性や変容性を飼い殺しているといえよう。

被災地は時間性を欠いた、首尾一貫した言説に代表される空間としてではなく、つねに変化する諸要素の一時的な布置(マッキー, 2014: 267), すなわち被災地という場所として理解されなければならない。特定の時間／空間に偶発的に〈ともに投げ込まれた〉他者との間で生じる諸交渉を通じ、社会的、暫定的に立ち上がるものとして被災地という場所を捉えていく。その場所は何か先立つものを前提とするることはできず、また特定の帰結に回収されることもない非予定調和的なプロセス(杉江, 2023: 32)である。

ゆえに私は被災地という「場所を実践する」(the

*practicing of place*) (Massey, 2005: 154 = マッシー, 2014: 289 強調は原文) と表現する。繰り返しの実践のなかで都度生成される「被災地という場所」はその都度異なるものであり、複数形 (places) で表現されるべきものだ。そしてそのような交渉、実践の反覆とともに生きるという意味で「被災地〈と〉生きる」という表現を用いたい。

### (1) 石巻の語り方

Ⅲ章2節で私は、社会に流通する被災地言説が、石巻の語られ方を枠づけている現実を書いた。一方で「外部」から石巻がまなざされ、語られる方法だけが被災地言説とともににあるわけでもない。

「震災と石巻はこれからも多分切っても切り離せないものなんだろうなって思うけど、その反面、(石巻は)ずっと被災地なのかなとか、いつまで被災地でいるんだろうなっていうふうなのはちょっと思ったりはします。他に魅力がないのか、っていう」

ミサキさんは、「(石巻は)やっぱりすごい経験をした場所だと思うし、そこから伝えられるものがあるならどんどん伝えていくべき」と語り、被災地として語られる地元・石巻を冷静に見据えている。他方で「ちょっと思ったりはします」という控えめな表現を用いながら、「(石巻は) いつまで被災地でいるんだろう」とも語る。被災地言説に代わる語り方を提示できていない石巻というまちに、少し不安を感じている様子である。

ハルカさんの語りはさらにもう一步踏み込んだものだ。彼女は「大変だねーって言われたり、もの送つてもらったり … それで自分がこう(持ち)上げられるじゃないけど、みんなからそういう対象にされるっていうのを … (いまも)期待している … そういう人が(石巻に)まだいる」と語る。つづけてミサキさん同様に遠慮がちに、被災地という語り方を塗り替えられないというより、石巻に向けられた被災地言説を意図的に「利用」さえするような一部の石巻の人びとのへ疑惑を差し向け、次のように語っている。

「こんなにまちも快適になって、きれいになって、新しいものがつくられてるのに、なんか、まだなんか被災地被災地っていうのを、当事者たちが引きずってるなあって … 若干なんかこう、(「引きずってる」当事者たちを前に)引いちゅう感じっていうか、なんでこんな暮らしやすいのに、そこまで言ってるんだろうな … って思っちゃう(部

分もある)」

クライマンほか (2011: vi) によれば、社会的な苦しみが表象される際、次第に表現されたものそれ自体が、苦しみの経験そのものとして受け取られるようになっていくという。その傾向は「個人的な『目撃』でさえも、譲歩させられる」(クライマンほか, 2011: vii) ほどの強さを備え、実際に石巻に暮らす人びとの、地元へのまなざしをも規定している。そこには、被災地言説、表象によって他者化された人びとが、他者化をとおして自己表象を作り上げていく側面(森, 2021: 150)を見出すことができる。

Ⅲ章2節で述べた自己紹介の場面のように、被災地という場所の実践のなかで、被災者や当事者と呼ばれる人びとは「客体」という役割に往々にして閉じこめられている。しかしハルカさんの語りを踏まえれば、彼(女)らも被災地という場所を実践する「主体」の一人であって、被災地言説の単なる「客体」ではない。あらゆる人びとが相互作用を通じ、被災地という場所をつねに「少しばかり作り変えている」(マッシー, 2014: 228)といえる。

都度実践を通じ作り替えられる動態的なものとして被災地という場所を捉えることで、被災者を「一枚岩」の存在と措定し、被災地を首尾一貫した空間と想像する視座から逃れることができる。2人の語りを踏まえれば、被災者は決して「一枚岩」の存在として想像されるべきではない。「一枚岩」ではないからこそ、誰が誰との出会いにどのように応答するのか(同: 269)、どのように被災地という場所を実践するのかが問題になる。

なお本研究が、震災を「引きずってる」当事者の人びとの声や想いを否定するものではないことは強調しておきたい。ひとすじの「直線的な時間」を念頭に、発災からの年月の経過とともに次第に震災や被災経験からの「脱却」を迫る態度は、被災地を「回復」や「復興」といった、現状支配的なストーリー、表象に容易に還元してしまう。本研究は、震災を自然現象というよりも、むしろ人間の経験として(内尾, 2018: ii) 捉えている。特定の経験を否定することは、本研究が批判する、人びとの多様な声を等閑視してきた被災地言説と全く同じ陥罪に陥ることになってしまうだろう。

### (2) 被災の語りの変容と播らぎ

1項で議論してきたことに加え、一人ひとりの個人的な震災や被災地の語り方自体も、そもそも固定

的なものではなく流動するものである。

「小学校に子どもを迎えていて、自分は避難した。絶対津波は来ると思っていたのに、子どもと一緒に海の方の自宅に帰っていった人に、なんあの時、「自宅に戻るんですか?」って言えなかつたんだろうってずっと後悔している。それでその方は結局亡くなられた。…逃げなさいって言ってまわっていた地域の方<sup>33</sup>が、言って回る最中に津波にのまれて亡くなってしまって、(逆に)逃げろって言えなかつた自分が生きている。その苦しみ、そういう想いをみんなにもしてほしくないし、もう自分もしたくないから、なんとかここ(=「311MN」)にかかわりづけてる。」

引用した語りは、「311MN」の活動の方向性を整理するためのミーティングの場で、どのような想いで団体に関わっているのかを発表する際、涙ながらにメグミさんが語っていた内容だ。メグミさんとは「311MN」の業務のなかで、石巻から仙台や福島まで複数回、車で一緒に移動する機会があった。そのため私はこの語りに先立ち、メグミさんが「311MN」で働き始めた経緯を個人的に聞いていた。その際に聞いていたのは、メグミさんの旦那さんが「311MN」とつながりがあつて、という話であった。しかし発表の場でメグミさんは、(自分が声を掛けられず津波の犠牲になった)あの子の未来を奪ってしまったのは自分なのではないか、という後悔や罪悪感を「311MN」に関わり続ける理由として語った。この後悔や罪悪感を他人に話したのは、その発表の場がはじめてだったといふ。

私との何気ないやりとりの中で語られた、知り合いだったからという理由も、発表の場で涙ながらに語られた理由も、メグミさんにとってともに偽りのない事実であるはずだ。それでも場面に応じメグミさんの語りは揺らぐ。同様の揺らぎは、次に引用するミサキさんによる進路選択の背景にある震災についての語りにも透けて見える。

「(ミサキさんが)小学校の先生になりたいって思ったときっていうか、(なりたい)と思ったことを伝えた友達がいるんですけど、…でもその子は、亡くなってしまった、震災でなくなっちゃつたんですね。それで、そのことを、それが全部、その子がなれなかつたから私が小学校の先生になりたいっていうわけじゃないくて、もちろん私のなかでもいろんな理由があるんですけど、それをあんまり言いたくないな、自分のなかでずっとしまって

おこうって、ちっちゃいときからずっと思つてたのは、やっぱりそういう経験があると、なんかすごいかわいそうだったりとか、責任感を感じてるのかなとか、そういうふうに思われちゃうんだろうなって思つていて、テレビとかでもすごいつらい経験をした、すごい大事な人を亡くした人たちが、立ち上がって前をむいて、今頑張ってるよ、みたいなそういうふうな、なんか放送が結構多いかなと思うんですけど、でも、なんか自分は、そなりたくないわけじゃないんですけど、それをたくさんみてきたから、特別視されるってやっぱ思つちゃう。…そういうなんだろう、(そういう)目が入っちゃうのが、あんまりまあ嬉しいはなかったのかな、当時から。だからずっと今でもあんまり言つてなくて。」

「私たちにとって、石巻とか、その人とか、亡くした人とか、震災だけのときじゃないものだと思うんですよね。だから、そこにだけ、注目されちゃうと、やっぱりつらいことだったり、苦しいことみたいになっちゃうけど、全体、私たちの長い、ずっと生きてきた過程のなかだったら、ちょっとつらかった時期があった、瞬間がそこだっただけで、そこまでずっと楽しかったり、嬉しかったりっていう思い出があることが、なくなっちゃうっていうか、そのつらいことだけが自分の頑張ってる理由じゃないって思うし、そう思われるんだったら、伝えないでいた方が自分も、まわりも、もっと自分のそれまでの部分をみてもらえるような気持ちになるのかなって思います。」

ミサキさんが、教員を志望する理由の一つ(あくまで「一つ」に過ぎないことは改めて強調しておきたい)に、震災で亡くした友人の存在がある。されどその友人を震災で亡くしたという経験を、彼女はほとんど語つてこなかつた。その理由としてミサキさんは、亡くなつた友人の存在こそが、教員を志望する理由のすべてであるかのように聞き手に受け取られてしまうことへの拒否感を擧げる。

矢守(2018: 97-98)は、被災に関する「ドミナントストーリー」として〈喪失・懲悔の語り〉〈苦闘・悲嘆の語り〉〈美談・献身の語り〉〈教訓・備えの語り〉という4類型を提示した。つづけて災禍をめぐる語りについて、「語るときに依拠するフレームワークが特定のものに偏向したり、出来事の当事者が必ずしも望まないフレームワークが第三者によって公然とあるいは暗黙のうちに強制されたり」(矢守, 2018: 98)することがあると指摘する。「大事な人を亡くした人たちが、立ち上がって前をむいて、今頑張ってるよ、みたいな…目が入っちゃうのが

… 嬉しくはな」いという語りは、他に置き換えるのない彼女に固有の進路選択の理由が、第三者によって暗黙のうちに〈美談・献身の語り〉というフレームに回収されて理解されてしまい、実質的に無声化されることへのミサキさんによる異議申し立てだ。幼くして友人を津波で亡くしたというミサキさんの経験が、容易にドミナントストーリーに回収され、消費されてしまうことは想像に難くない。そうして定型化された「物語」の主人公は、もはやミサキさんではない。そこに立ち上がる主人公は、「友人を津波で失った、かわいそうで、つらくて、悲惨で、悲劇の被災者」である。だからこそ「もっと自分のそれまでの部分をみてもら」うために、換言すれば聞き手との関係性を、「聞き手対被災者」ではなく「聞き手対ミサキさん」という関係性のまま維持するためにドミナントストーリーに回収されることが予見される経験は語られない。

他方でミサキさんは「私が教員になりたいのもあると思うんですけど、震災を経験をしたからとか、被災地で小学校をそこで卒業したからとか、だから自分にできることを強みにしたいみたいな、(時間が経つなまで)経験、被災の経験を強みにしたいなって考えるようになったなあって思います」とも語っている。このように彼女の口から、震災をめぐる「ドミナントストーリー」に近い言葉が紡がれる場合もある。

被災地という場所の実践に関与するそれぞれの主体は、つねに他者との出会いのなかで変化し、揺らいでいる。一人ひとりの語りのなかで、震災が前景化する場合もあれば、徹底して後景化しようとする戦略がとられる場合もある。震災が石巻で出会った人びとの生へ与えた影響の大きさに私は、たびたび圧倒された。他方でセンセーショナルな語りだけを殊更に取り上げるのも、被災地という場所の多様性を奪うことになるだろう。

マッシー(2014: 111)は「われわれは他者なしに何かに『なる=生成変化する』(become)ことはできない」のであり、「なる=生成変化する」ための必要条件を提供するのが空間<sup>34</sup>だと述べた。逆説的に、われわれは空間に支えられてこそ人間ならざるものも含む他者と出会うことが可能になり、その出会いに何らかの方法で応答したりしなかつたりする、その繰り返しを通じて、つねに何ものかに「なり」づけている。その意味でも1項で書いたように、被災地という場所の実践は、あらゆる主体の相互作用のなかで展開されるものと捉えられるべきである。

さらにマッシー(2014: 240)は「あなた自身が変化

してきたのと同じように、その場所は移ろっている」と述べる。ゆえに被災地という場所もまた都度実践され、繰り返しの実践のなかで揺らぐ、暫定的なものに過ぎない。領域内部の一貫性を前提とする近代的な空間概念にもとづいて被災地を捉える限り、こうした揺らぎは捨象される。その揺らぎを消去、隠蔽し、都合の良い一面だけを切り取って被災地をまなざすこと、そのまなざしこそが語り手たちに違和感をもたらしている。

### (3) 「死者」とともに生きる

1項では通常被災地言説の「客体」とされる被災者や当事者と呼ばれる人びとも、単なる「客体」ではなく、被災地という場所の実践に関与していることを述べた。2項では、被災地という場所の実践に関与するそれぞれの主体が、つねに他者との出会いのなかで変化し、揺らぐものであること、それゆえ各主体の出会いと応答によって実践される被災地という場所も暫定的なものでしかないことを述べた。3項では、被災地という場所の実践に関与する主体をさらに拡張する。ここで導入されるのは「死者」の存在だ。

石巻市における東日本大震災の死者・行方不明者数を、私はⅡ章1節で「3,118名の死者数と414名の行方不明者数が市によって確定」と持って回ったように表現した。それは次の2つの理由による。第一に、このような統計的な数字だけを以て被災地を捉えることは、ここまで繰り返し批判してきた「つねにすでに領土化されたものとしての空間というモダニズム的な想像力」(マッシー, 2014: 268)を強化することに与してしまうからだ。絶対的空間の無限の広がりから、有界化によって有限の広がりをもつ容器としての空間(領域)を切り取ることによって、人びとは容器の内部に経済・社会を崩壊させることなく成立させてきた(水岡, 2002a: 69-70)。境界によって有限の領域として切り取られた空間を前提としてはじめて、統計的に死者数・行方不明者数を数え上げることが可能になるのは言うまでもないだろう。

そして二つ目の理由は行政によって「死者」と認定され死者数に計上されることと、語り手が身近な存在の「死」を受容することとは、必ずしも同列に扱いうるものではないからだ。以下、後者の点についてさらに議論を深めていく。

門脇町の自宅を津波で流失し、また愛犬や友人を津波で亡くしたカオリさん。発災後も何かに突き動かされるようにして自宅跡付近にやってきては、愛

犬が飲めるよう自宅跡に水を置いたり、犠牲になつた友人宅の跡で故人と「一緒に会話をしながら」タバコを吸つたりしていたという。カオリさんの知人で、震災で息子さんを「亡くした」お母さんが、「うちちは（「亡くなつた」息子さんは）ちょっと（姿が）みえないだけで、いるんだよ、そう思いながら生活してる。だから家族は誰ひとり、手をあわせて、お線香あげて、みたいな生活はしていない。…震災前と同じように、いまもまだ、みんなここで一緒に住んでると思ってる」と語ってくださったこともあった。

工藤(2016)は、石巻のタクシードライバーを中心には語られる、「幽霊」と思われる存在と直接対話したり、接触したりした経験を記述している。そうした幽霊は、突如その生涯を終えなければならなくなつた死者たちが抱える無念が具現化した存在だと工藤(2016)は分析した。その分析はタクシードライバーたちの「死者」に対する認識の反映とも読め、石巻のタクシードライバーたちが持つ認識も生／死という二元論を相対化したものであることがわかる。若松(2012: 43)も東日本大震災の死者を念頭に、「死者と共にいるということは、思い出を忘れないように過ごすことではなく、むしろ、その人物と共に今を生きるということではないだろうか。新しい歴史を積み重ねることではないだろうか」と述べる。カオリさんやその知人の方は、まさに発災後も「死者」と「新しい歴史を積み重ね」ていると言えよう。

他方で生／死という二元論を超えた語りではなく、むしろ生と死を峻別した理解にもとづいた語りがなされる場面もある。地震発生から津波襲来までの約60分間で、海岸から100m程度の自宅へ2度戻りながら生還したツトムさんは、彼が発災以後抱え続ける後悔や自責の念について次のように語る。

「地震の後、津波が来るまでの1時間の間に、ご近所さんと「大丈夫、大丈夫」という言葉をかけあつた。これは落ち着け、くらいのそこまで深い意味を込めないで言った言葉だったけど、結果的に、その会話、「（ここは）大丈夫」っていう俺の言葉で死んだ人がいる。そういう言葉を発した人が、生き残ってよかったのか…。」

2度自宅に戻ったこと、結果的に津波で壊滅した土地で「大丈夫」という言葉を発してしまったこと、それらをツトムさんは「死んで当然」の行動と悔いる。そして、あの日理不尽というしかない状況で死を迎えるをえなかつた命<sup>35</sup>を念頭に、「本当は生きていていいはずの人が死んで、死んで当然の自分が

生きている」という不条理がどうしても納得できないと語る。2時間ほどの聞き取りのなかで、彼の語りは何度もこの言葉へと回帰した。この「不条理」はツトムさんを徹底的に追い詰め、自身が生き残ったことを正当化できる理由を後付けでも見つけたいと、常に何かに駆り立てられるように日々忙しく生きてきた。そこには、ぐたくたになって泥のように眠らないと悪夢をみてしまうという背景もある。強い後悔や葛藤、自責の念を前に、絶えず活動的でいざるを得なかつたツトムさん。そこに彼を突き動かしつづけてきた「死者」の存在を見出すことができる。

カオリさんやツトムさんの語りから、「死者」もまた一枚岩の存在として想定することは困難であり、生存者との多様な関係性のなかで、被災地という場所の実践に関与していることがうかがえる。さらにカオリさんへの聞き取りのなかでは、時に生／死を不安定化する語りが語られ、時には生／死を厳格に切り分けた語りがなされるなど、個人のなかでも場面に応じて「死者」との関係性が都度組み換えられていることが明らかになった。しかし、ここで強調したいのが生／死の境界を不安定化しようが厳密に切り分けようが、石巻において「死者」という存在を無視することはできないという点だ<sup>36</sup>。ゆえに、「死者」もその議論の射程に組み込み得る枠組みで被災地を捉えることが必要だ。1節で示した通り、マッサー(2014: 290)は人間ならざるものも含む他者と「どのようにしてわれわれはともに生きるのか」を問題にしてきた。カオリさんやツトムさんの語り、そして工藤(2016)からうかがえるのは、まさに人びとが「死者」との出会いにそれぞれの方法で応答し、交渉し、ともに生きてきた姿である。

以上2節1項から3項で具体的に記述したように、被災地という場所は、流動性を備えた多様な主体間の暫定的な関係性のなかで構築、そして実践されるものとして捉えなおす必要がある。そのようなものとして捉え直すために、逆説的だが「容器」としての空間概念から被災地を解放しなければならない。

### 3 「被災地」〈と〉生きる

III章では、被災地言説に規定された石巻への固定的で実体的なまなざしを問題化し、IV章1、2節で従来のまなざしを相対化した、被災地へのオルタナティブな視座を提出した。それにあたっては、石巻で出会った語り手たちの個人的で具体的な語りを取り上げて論じ、同一人物の語りでさえ、そこに一貫したものは見出しえないことも確認した。本節では敢えて再びマクロな視点に立ち戻り、少し抽象度を

高めて、本研究が提示する被災地へのオルタナティブな視座を補強したい。

私がIV章2節で提示したのは、誰がどのように被災地という場所を実践するかという視点である。前節でその一端を示したように、実践の様相は多様かつ、実践する主体やタイミングに応じ変動する複雑なものだ。ゆえに同じ「被災地」という呼称で表現しているものの、被災地言説が指定するところの「被災地」と、前節で提示した被災地へのオルタナティブな視点と言うときの「被災地」とは、質的に異なっている。被災地言説が指す「被災地」よりも、本研究が提示する「被災地」はより多くを包含できるような概念化である。最大の差異は、前者が近代的な空間概念と固く結びついているのに対し、後者はマッサー（2014: 24）が主張する「これまでに代わる空間へのアプローチ」に依拠する点だ。

本研究が繰り返し取り上げてきた近代科学の枠組みのなかで、自己／他者という二元構造もまた搖るぎないものとして構築されてきた。その二元構造に依拠して被災者、遺族を自己とは根本的に異なる他者として想像、構築し、彼(女)らを自己と切り分け排除する過程で、「差異の空間化」（ハバード, 2002: 118-150; 阿部, 2003）が進行していった。その結果、被災者や遺族といった他者の存在こそが、被災地という空間を成立させる前提となり、被災地と、自己にとって馴染み深い空間とは、明確に線引き（有界化）された。その明確な境界線が、再び被災者や遺族という他者と自己とを差異化する根拠として機能する。以上のような循環のなかで他者、そして他者に代表される他所を構築、強化する過程が、熊谷（2019: ii）の問題視する「他者化」である。近代的な空間概念に支えられた被災地という空間の「他者化」こそ、被災地の本質化を招き、一面的で固定的な被災地言説を強化してきた原因として、乗り越えられなければならない。

そのために、近代的な空間概念とともにマクロに被災地を実体化する従来の視座では被災地とされない土地に生きる私たちもまた、被災地という場所を構築、実践する主体であり、「被災地〈と〉生きる」一人だと捉え直すことが必要である。私はそのような読みを可能にするために、「被災地〈と〉生きる」<sup>37</sup>という表現を用いる。地震の揺れを自らの身体で経験した人、計画停電の影響を受けた人、震災が契機となって移住した人、ボランティア活動に参加した人、募金活動に協力した人、メディアで報道される惨状に心を痛めた人、それぞれが東北地方太平洋沖地震を契機に「かつては無関係だったものが結び付くと

いう、いくぶん単純な意味における場所という出来事」（マッサー, 2014: 267）に無数の形で関与しつづけている。それぞれが被災地〈と〉生きてきたし、生きている。そしてこれからも生きていくだろう。

加えて「被災地〈と〉生きる」という表現は石巻、すなわち被災地言説においてまさに被災地と想像される土地に暮らす人びとにとっても、妥当な表現であるはずだ。彼(女)らの生に被災地という場所が立ち現れる頻度や度合いは、つねに変化する。その生はステレオタイプ的な被災地言説でつねにすべてが説明可能なものではなく、同時に被災地言説に依拠することなしにつねに説明できるものでもない。

被災地という場所を実践する、すなわち「被災地〈と〉生きる」と捉えることで、「容器」としての被災地という空間の外部／内部、また被災地言説の主体／客体、そういった単純な二元論を揺さぶることができる。それは空間を相互作用を媒介として構成されるものと捉え、主体／客体という境界を徹底して不安定化しようとするマッサー（2014）の主張にもかなうものだ。

## V おわりに

宮城県石巻市で実施したフィールドワークを通じ、被災地をマクロな視点から実体的なものとしてまなざす、一面的で固定的な被災地言説が語り手たちに違和感や葛藤を抱かせていることが明らかになった。本研究ではこうした問題含みの被災地言説を相対化し、それに代わるまなざしはどうありうるのかを検討してきた。V章では先に記述した内容をまとめた上で考察を深め、本研究で取り組めなかつた課題を提示して結びとしたい。

本研究は被災地言説が語り手たちに違和感を与えてきた原因を、被災地が近代的な空間概念と強固に結びついて想像されてきたことによるものだと主張した。近代的な空間概念は、空間を脱歴史的に、所与に分割された社会や文化のいわば「容器」（杉江, 2023: 23 強調は原文）かのように扱ってきた。マッサー（2014: 128）はそれを「空間の領土化」と呼ぶ。このような空間概念に依拠する限り、被災地という「容器」の内部には、一様に均質に被災地らしい何かが充満しているものと想像されてしまう。実際の被害はそう単純ではないし、人びとの経験も多様であるにもかかわらず、従来の東日本大震災の被災地を扱った研究の大半が、近代的な空間理解を前提として、少なくともそれを疑うことなく、被災地を捉え

てきた。

I章では、そのような問題意識から人文地理学における近代的な空間／場所概念の成立とその問い合わせの系譜を概観したうえで、マッシー（2014）の空間／場所概念を整理した。その概念は近代科学という枠組みそのものを批判的に捉えなおそうとするものであり、マッシー（2014）の提示する概念に依拠することが本研究の問題関心に照らして有効な理由を説明した。あわせてこうした視座に立つ以上、被災地とはこういう空間／場所だ、と一義的に普遍的に記述することを目指すものではないという本研究の態度を明示した。

III章では2人の語りを引用し、石巻という地名がつねに被災地言説とともに語られることで、語り手たちに違和感や葛藤をもたらしていることを明らかにした。こうした違和感や葛藤の原因が「空間の領土化」（マッシー、2014: 128）であることを説明し、なぜ近代的な空間概念に支えられた被災地へのまなざしが相対化されねばならないのかを記述した。

つづくIV章では1節でマッシー（2014）の空間／場所概念を本研究に即した形で展開した。それを踏まえ「場所を実践する」(the *practicing of place*) (Massey, 2005: 154=マッシー, 2014: 289 強調は原文) という切り口から、被災地という場所が、それ自身も流動的で多様な主体間の関係性のなかで、都度暫定的に構築、実践される出来事として捉え直さるべきだと主張した。3節ではマッシー（2014）が繰り返し問題視してきた近代的な二元論に立ち返り、マッシー（2014: 267）の〈ともに投げ込まれていること〉という表現をも踏まえた「被災地〈と〉生きる」という二元論を超える視点を提示した。

本研究は決して被災地一般を論ずるものではないし、限られた期間でのフィールドワークの中で私が見聞きしたことにもとづく議論に過ぎない。それでも私も含む多くの人びとが「被災地」とまなざしてきた宮城県石巻市でのフィールドワークから、一面的に固定的な被災地言説を相対化しうる視座を提供することには、一定の意義があると考える。

本研究の基底にあるのは、紛れもなく私自身が一面的に、固定的に被災地や被災者をまなざしていたという反省である。そしてなによりそのことに気付かせてくれた、石巻で出会った人びとの感謝である。その点で本研究の問題意識は極めて個人的な経験に由来する。しかし、それが本研究の意義を薄めることにはならないはずだ。私にそう確信させるのは、「まなざされる」側からなされる、被災地や被災者という言説、表象によって、消去され隠蔽されて

いたものを問い合わせる複数の発信<sup>38</sup>に会えたことだ。こうした発信の存在は、被災地や被災者というまなざしが、いかに「まなざされる」側の人びとに大きな影響力を及ぼしていたかということの裏返しである。

本研究では本質化される被災地というカテゴリーの相対化を求めてきたが、ジェンダー地理学の立場から村田（2009: 164）によって、カテゴリーの相対化の限界も指摘されている。私たちのまなざしとカテゴリーは切っても切れない関係がある以上、カテゴリーの相対化には「終わりがない」側面がある（村田, 2009: 164）。

たしかに私たちは被災地や被災者のみならず、あらゆる言説や表象、カテゴリーに依拠して他者をまなざしている。カテゴリーに頼らずして活動することは、物理的世界はおろか、社会的・知的生活のいずれにおいても不可能であろう（レイコフ, 1993: 6）。しかしあらゆるカテゴリーの本質視は、カテゴリー化の過程で消去され隠蔽される存在への注目を困難にする以上、そのまま放置しておくことは慎まれるべきだ。私たちがカテゴリーに頼らざるをえないからこそ、カテゴリーを疑い、カテゴリーへのまなざしを一層洗練されたものへと鍛え上げる努力を怠ってはいけないと思う。他者を特定のカテゴリーとともにまなざすとき、そのカテゴリーに包含されることで、つねに捨象され排除されてしまう声があるはずだと想像できる、真摯な態度が私たちには求められている。

人文地理学においても、他者に関わる空間的カテゴリー（言説、表象）の構築や改変のプロセスは繰り返し論じられてきた（たとえば、大城, 1998, 2009, 神田, 2001, 阿部, 2003, 荒山, 2009, 原口, 2012, 佐藤, 2019など）。広く捉えれば本研究もそうした系譜のなかに位置付けることができる。そして原口（2012）や佐藤（2019）は、あるカテゴリーとあるカテゴリーの間の境界の構築や改変、解体や再構築のプロセスへの注目を提起する。本研究が「被災地〈と〉生きる」という表現を敢えてその主語を曖昧にしたまま、あらゆる存在を主語にできる状態で用いてきたのも、被災地というカテゴリーと「被災地ではない空間／場所」というカテゴリーの境界を不安定化させ、乗り越えようとする野心的な試みによるものである。私の力不足ゆえ、この「被災地〈と〉生きる」という視座の提案が觀念的なものにとどまり、説得性に欠ける点は本研究の課題である。疑うことなく被災地に本質的なものを求めてきた私のような人びとに、実感を以て受容される視座

に鍛え上げていくことは本研究に残された大きな課題だ。被災地〈を〉従来のように一面的に表象したり、何らかの基準で定義したりするのではなく、被災地〈と〉いかに付き合っていくのか、それが私たちには問われている。

## 謝辞

本研究は、2023年度に京都大学大学院文学研究科に提出した修士論文をもとに一部を改稿したものである。この研究は、公益社団法人3.11メモリアルネットワーク代表理事武田真一様、専務理事中川政治様、スタッフのみなさま、一般財団法人まちと人と代表理事齊藤誠太郎様、スタッフ・インターンシップ生のみなさまをはじめとする、宮城県石巻市で様々なことを私に教えてくださった皆様の存在なくしては成立しえなかつた。ここに記し、深謝の意を表します。みなさまに出会えたことは一生の財産です。本当にありがとうございました。

あわせて様々なご指導をくださった、お茶の水女子大学熊谷圭知先生、金沢大学人間科学系中島弘二先生、東京大学人文地理学教室小田隆史先生、そして京都大学地理学教室杉江あい先生、米家泰作先生、水野一晴先生、埴淵知哉先生に深く御礼申し上げます。

## 注

- 1) 「東日本大震災に対処するための特別の財政援助及び助成に関する法律」(平成二十三年法律第四十号) の第2条第3項において「この法律において『特定被災区域』とは、東日本大震災に際し災害救助法(昭和二十二年法律第二百八十八号)が適用された市町村のうち政令で定めるもの及びこれに準ずる市町村として政令で定めるものの区域をいう」と定められている。また同法第128条では中小企業信用保険法の特例として「東日本大震災復興緊急保証」が示されている。
- 2) 本研究において「私たち」というとき、一面的で固定的な被災地言説に則って自らを被災地の「外部」者であると信じている人びとを指している。
- 3) 本研究では、固有のポジショナリティを有した「私」(鈴木)という記述者を透明化することを回避するため「私」という主語を用いて記述する。
- 4) たとえば山崎(2013: 154)は、東京電力福島第一原子力発電所事故に伴う放射線物質の拡散状況に関する地図を例に、私たちの空間の想像の仕方とその表象の仕方が社会的に重大な影響を及ぼしたことを探している。
- 5) そのほか特筆すべきものとして、東日本大震災における「被災周辺地域」として茨城県日立市を取り上げて発災後の復興過程等を検討した久保ほか(2013)がある。被災地かそれ以外か、という二元論を超えた視座で特定の市町村を事例として扱う稀有な研究だ。ただし久保ほか(2013)も被災地という空間を特定の「領土」と結び付けて捉え、自明視している点で、本研究が批判してきた他の人文地理学研究と同様の批判は向けられてしかるべきであると考える。
- 6) 絶対空間には次のような特徴がある(水岡, 2002b: 36)。  
①連続的で均質性をもち、そして無限に、どの方向にも等しく広がるという性質をもつ。②あらゆる物体、人間、社会などすべての物を収容する「容器」として機能する。
- 7) そうした批判の背景には既存の科学や学問が、泥沼化したベトナム戦争や経済の停滞、公民権運動などによって混迷を極める1960年代末のアメリカにおいて無力だったことへの反省がある(野澤, 2005: 161)。
- 8) 男／女という二元論を前提とし、「女性を不平等な状態に置かれた1つのグループ」として扱う1970年代末までのフェミニズム地理学を指す(吉田, 1996)。
- 9) ポストモダン・フェミニズムは、女と男という2つの性別が存在していること、その間に一貫した明白な区別があること、それが女性、男性とされた人々を根本的に支配していること、従来のフェミニズム理論がこれらを暗黙のうちに前提としてきたことを問題視し、女／男というカテゴリーを疑いなく使用すること自体に批判の眼を向けた(坂本, 2000)。
- 10) マッサー(2002)はハーヴェイの場所概念の①場所には単一の本質的なアイデンティティがあるとする点②内向化された歴史から場所のアイデンティティー場所感覚一が構築されるとする点③境界線の画定を必要とする点を批判している。
- 11) 熊谷(2019: 38)は次のように整理している。①場所は静態的なものではなく、プロセス②場所は閉じた領域を持たない③場所は單一で固有のアイデンティティを持たない④①～③は場所の重要性や固有性を否定するものではない
- 12) なおこうしたマッサーの場所の定式化については、ハーヴェイ(2013: 343)から「場所の概念がもともと把握しようと企図していたはずのものを大部分犠牲にしている」として、またネグリ・ハート(2003: 562)からも「境界線をもたない場所という概念が、その概念から完全に内容を抜き去ってしまう」として批判が寄せられている。
- 13) <https://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10181000/0040/2204/2204.html> (2023年12月27日最終閲覧)
- 14) 宮城県及び宮城県警察によって確定された、平成23年3月11日現在における住民基本台帳上の死者数及び行方不明者数。石巻市で被災された死者数及び行方不明者数は、死者3,553人(災害関連死を含む)、行方不明417人が宮城県及び県警によって確定されている。<https://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10106000/7253/20141016145443.html> (2023年12月27日最終閲覧)
- 15) 「東日本大震災からの復興『最大の被災都市から世界の復興モデル都市石巻を目指して』」(令和5年10月版)p. 1より(<https://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10184000/100/8235/hukkouyoukyou/11hukkouyoukyou1.pdf> 2023年12月27日最終閲覧)

- 16) 前掲15, p.1
- 17) 前掲15, p.5
- 18) この点は岩手・福島両県にも同様に整備された復興祈念公園との最大の違いである。
- 19) 津波火災によって「壊滅」した門脇・雲雀野・南浜地区を写した映像も、東日本大震災の被害を代表する映像としてしばしば用いられる。
- 20) 前掲15, p.16
- 21) <https://kahoku.news/articles/20231110khn000020.html> (2023年12月27日最終閲覧)
- 22) 石巻南浜津波復興祈念公園内のみやぎ東日本大震災津波伝承館は、屋根の高さがこの地に襲来した津波の高さとされる約6.9mになるように設計されている。
- 23) <https://www.asahi.com/articles/ASP9Z6VJJP9YUNHB00C.html> (2023年12月27日最終閲覧)
- 24) 石巻日日新聞 2016年8月1日号「永遠の南浜、門脇 1 自然・風土を考える《私考》」元・門脇五丁目住民 矢口清志氏執筆
- 25) <https://www.mizu.gr.jp/kikanshi/no48/09.html> (2023年12月27日最終閲覧)
- 26) 2011年3月15日に社会福祉法人石巻市社会福祉協議会が立ち上げた石巻市災害ボランティアセンターと協働しながら石巻における緊急支援を展開。予め明確な支援内容や目的を持つ多様なNPO間の連携を強化し、各団体の組織力や実行力を活用した支援活動を行うべく、2011年3月20日に発足した「NPO・NGO連絡会」をその起源とする（公益社団法人みらいサポート石巻報告書作成チーム, 2016: 2）。
- 27) たとえば「2022年度東日本大震災伝承活動調査報告書」(<https://311mn.org/wp/wp-content/uploads/2023/12/311DisasterEducationReport2022.pdf> 最終閲覧2023年12月31日)の作成などを通じ、岩手・宮城・福島3県で震災伝承活動に関わる方々が感じている不安や課題意識などを広く知ることができた。
- 28) 発災直後のボランティア活動のなかで、石巻出身で現代表理事の松村豪太氏が発災以前より親交のあった人びとなどと結成。単に瓦礫だらけの石巻を復旧させるのではなく、発災以前の石巻が抱えていた課題をも解決するため多様な活動を展開している。合言葉は「世界で一番面白い街を作ろう」。[\(https://ishinomaki2.com/\)](https://ishinomaki2.com/) 最終閲覧2023年12月27日)
- 29) 北上川を改修し、石巻に港を開いた川村孫兵衛への感謝を表す石巻最大の祭。発災以後は震災の犠牲者を追悼する性格も加わった。2023年は第100回の節目にあたり、8月4日(金)から6日(日)にかけて盛大に行われた。
- 30) マッキー (2014) の空間／場所概念に依拠する限り、内／外の区別は困難であるため本研究では括弧書きを採用している。
- 31) 前掲15, p.1
- 32) マッキーの空間論に依拠することで、従来の地理学者が表象の対象としてきた首尾一貫した空間から逃れることができる(森, 2011: 135)。
- 33) メグミさんの語りの前半部で登場した、海の方の自宅に帰っていった人とは別の方である。
- 34) IV章1節に示した新しい空間へのアプローチ ②同時代の複数性という意味における多様性の存在可能性の領域(マッキー, 2014: 24)として空間を捉えるため、空間なくして多様性(他者)は存在しない。
- 35) ツトムさんは、北上川を遡上してきた津波によって大きな被害を受けた石巻市立大川小学校で犠牲になった児童たちや、高台にあった園からバスで門脇町・南浜町に連れていかれ津波火災の犠牲になった日和幼稚園の園児たちを念頭に「理不尽というしかない状況で死を迎えるをえなかった命」と語っている。
- 36) 私がそのように捉える理由については II章1節1項参照。
- 37) エスノグラフィーなどにおいてしばしば用いられる「○○を生きる」という表現を下敷きにしている。一方で「被災地〈を〉生きる」という表現を用いないのは、語り手たちの生は決して震災、被災地、それだけですべて説明できるものではあり得ないということを強調するためである。〈喪失・懲悔の語り〉〈苦闘・悲嘆の語り〉〈美談・献身の語り〉〈教訓・備えの語り〉という被災に関する「ドミナントストーリー」(矢守, 2018: 97-98)に近い論調の河北新報社編集局(2022)のような視点も非常に重要なが、同時にそれがすべてだとは言えないはずだ。
- 38) たとえば現在石巻市の震災遺構として公開されている門脇小学校で、2023年1月、発災当時門脇小学校の6年生だった人びとが12年ぶりに同窓会を開催した。自身もその参加者の一人であるNHK宇都宮放送局の齋藤貴浩記者が、自ら同窓会を取材し構成した番組(2023年3月10日放送「とちスペあの日から12年—12歳で被災したぼくらの同窓会—」)のなかで、齋藤記者に向けられた次のような語りが放送される。「みんな同じこと思ってるんじゃないかな、って思うけど、たっか(=齋藤さん)がその、私たちの話とか震災の話を伝えようとしてくれているのは、まあいいなと思うし、協力したいと思うけど、それをまたいろんな人に改めて、『ああ大変だったねえ』『つらいことを経験してきたんだねえ』っていうふうに思われるだけの(番組の)まとめ方になるのは、すごく嫌だな、とみんな思ってると思うの。」番組では発災直後に石巻を離れたうしろめたさを抱え続けてきた齋藤記者が、一被災者(被災地言説の「客体」)として、そして一記者(被災地言説の「主体」)として、震災と向き合う様子が丁寧に描かれる(『『美談にしないでね』ぼくの母校は震災遺構』<https://www.nhk.or.jp/minplus/0025/topic059.html> 最終閲覧2023年12月28日)。

## 文献

- 阿部 隆・磯田 弦・山科綱香 (2021). 東日本大震災下の岩手県山田町における避難者行動と避難者の社会・人口的特性に関する地理学的研究, 地学雑誌, 130(2), 213-238.
- 阿部亮吾 (2003). フィリピン・パプ空間の形成とエスニシティ

- をめぐる表象の社会的構築——名古屋市栄ウォーク街を事例に. *人文地理*, 55(4), 1-23.
- 荒山正彦 (2009). 観光空間の形成とそのイメージ. 竹中克行・大城直樹・梶田 真・山村亜希編『人文地理学』ミネルヴァ書房, 145-160.
- 石巻市史編さん委員会 (1998a). 『石巻の歴史 第2巻[1]: 通史編 (下の1)』石巻市.
- 石巻市史編さん委員会 (1998b). 『石巻の歴史 第2巻[2]: 通史編 (下の2)』石巻市.
- 岩動志乃夫 (2021). 東日本大震災後の仮設商業施設から本設商業施設への移行と展開——釜石市と女川町の事例. 季刊地理学, 73(3), 148-163.
- 一般社団法人日本家政学会東日本大震災生活研究プロジェクト石巻専修大学復興共生プロジェクト編 (2016). 『東日本大震災石巻市における復興への足取り——家政学の視点で生活復興を見守って』建帛社.
- 岩間信之・佐々木縁・田中耕市・駒木伸比古・浅川達人 (2012). 東日本大震災被災地における食料品小売業の復興プロセスと仮設住宅居住者の生活環境問題. *E-journal GEO*, 7(2), 178-196.
- 内尾太一 (2018). 『復興と尊厳——震災後を生きる南三陸町の軌跡』東京大学出版会.
- 大城直樹 (1998). 現代沖縄の地域表象と言説状況. 荒山正彦・大城直樹編『空間から場所へ——地理学的想像力の探求』古今書院, 198-211.
- 大城直樹 (2009). 「他なるもの」／「外部」に介入する地理学的知. 竹中克行・大城直樹・梶田 真・山村亜希編『人文地理学』ミネルヴァ書房, 161-177.
- 大城直樹・丹羽弘一・荒山正彦・長尾謙吉 (1993). 1980年代後半の人文地理学にみられるいくつかの傾向——イギリスの最近の教科書から. 地理科学, 48(2), 91-103.
- 大平晃久 (2002). カテゴリー化の能力と地名. 地理学評論, 75(3), 121-138.
- 遠城明雄 (1998). 「場所」をめぐる意味と力. 荒山正彦・大城直樹編『空間から場所へ——地理学的想像力の探求』古今書院, 226-236.
- 遠城明雄・大城直樹 (1998). 序章. 荒山正彦・大城直樹編『空間から場所へ——地理学的想像力の探求』古今書院, 1-8.
- 梶田 真 (2016). 避難指示解除と復興の現実——福島県楢葉町. *E-journal GEO*, 11(2), 489-501.
- 加藤政洋 (1999). ポストモダン人文地理学とモダニズム的「都市へのまなざし」——ハーヴェイとソジャの批判的検討を通して. *人文地理*, 51(2), 48-66.
- 河北新報社編集局 (2022). 『復興を生きる——東日本大震災被災地からの声』岩波書店.
- 神田孝治 (2001). 南紀白浜温泉の形成過程と他所イメージの関係性——近代期における観光空間の生産についての省察. *人文地理*, 53(5), 24-45.
- カント, I. (宮島光志訳) (2001). 『自然地理学 カント全集第16巻』岩波書店. [Kants, I. (1802) *Physische Geographie*.]
- 岸 政彦 (2018). 鈎括弧を外すこと——ポスト構築主義社会学の方法. 『マンゴーと手榴弾——生活史の理論』勁草書房, 65-114.
- 岸 政彦・石岡文昇・丸山里美 (2016). 『質的社会調査の方法』有斐閣ストゥディア.
- ギデンズ, A. (松尾精文・小幡正敏訳) (1999). 『国民国家と暴力』而立書房. [Giddens, A. (1985). *The Nation-State and Violence*. Polity Press.]
- 櫛引素夫 (2012). 東日本大震災以降の地理学とマス・メディアの関係性の課題. 季刊地理学, 64(1), 12-15.
- 久島桃代 (2019). 農山村女性移住者と自然との関わりにみるライフストーリー——福島県昭和村における「織姫」と「からむし」との関わりから. 日本オーラル・ヒストリー研究, 15, 109-124.
- 工藤優花 (2016). 死者たちが通う街——タクシードライバーの幽霊現象. 東北学院大学震災の記憶プロジェクト 金菱清(ゼミナール)編『呼び覚まされる靈性の震災学——3・11生と死のはざまで』新曜社, 1-23.
- 久保倫子・益田理広・山本敏貴・卯田卓矢・石坂 愛・神文也・細谷美紀・松井圭介 (2013). 茨城県日立市における地域コミュニティと住民による東日本大震災後の防災対策. 地域地理学, 9, 56-68.
- 熊谷圭知 (2013). 場所論再考——他者化を越えた地誌のための覚書. お茶の水地理, 52, 1-10.
- 熊谷圭知 (2019). 『パプアニューギニアの「場所」の物語——動態地誌とフィールドワーク』九州大学出版会.
- クライマン, A.・クライマン, J.・ダス, V.・ファーマー, P.・ロック, M.・ダニエル, E. V.・アサド, T. (坂川雅子訳) (2011). 『他者の苦しみへの責任——ソーシャル・サファリングを知る』みすず書房. [Kleinman, A., Das, V., and Lock, M. eds. (1997). *Social Suffering*. University of California Press.]
- 栗生 明 (2021). 祈りの場. ランドスケープ研究, 85(1), 28-29.
- クリッフォード, J.・マーカス, G.(橋本和也・多和田裕司・西川麦子・和邇悦子訳) (1996). 『文化を書く』紀伊國屋書店. [Clifford, J. and Marcus, G. (1986). *Writing Culture: the Poetics and Politics of Ethnography*. University of California Press.]
- 公益社団法人みらいサポート石巻報告書作成チーム (2016). 『石巻におけるNPOの貢献 3.11——東日本大震災から5年』公益社団法人みらいサポート石巻.
- 駒木伸比古・岩間信之・田中耕市・佐々木縁・池田真志・浅川達人 (2021). 東日本大震災被災地における小売業の空間構造とその再編. 地学雑誌, 130(2), 239-260.
- 米家泰作 (2012). 「近代」概念の空間的含意をめぐって——モダン・ヒストリカル・ジョグラフィの視座と展望. 歴史地理学, 54(1), 68-83.
- サイード, E. W. (板垣雄三・杉田英明監修 今沢紀子訳) (1993). 『オリエンタリズム 上』平凡社. [Said, E. W. (1978). *Orientalism*. New York: Georges Borchardt Inc.]
- 坂本佳鶴恵 (2000). ポストモダン・フェミニズムの戦略とその可能性. 理論と方法, 15(1), 89-100.
- 佐々木達・小田隆史・関根良平 (2018). 福島県いわき市における農産物の風評被害の実態——農産物購買アンケートの分析. 東北地理学会編『東日本大震災と地理学』東北地理学会, 103-114.

- 佐藤香寿実(2019).「スケールのパフォーマティヴィティ」とストラスブルの大モスク建設——アクターの言説実践に着目して. *人文地理*, 71(4), 393-416.
- ジャッカリアー, P.・ミンカ, C. (北川眞也訳) (2013). 地中海的オルタナティブ. 空間・社会・地理思想, 16, 89-109. [Giaccaria, P., and Minca, C. (2011). The Mediterranean alternative. *Progress in Human Geography*, 35(3), 345-365.]
- 杉江あい (2021). イスラームとムスリムについて教える／学ぶ人のために——ムスリマのフィールドワーカーからの提案. *E-journal GEO*, 16(1), 102-123.
- 杉江あい (2023).『カースト再考——パングラデシュのヒンドゥーとイスラム』名古屋大学出版会.
- 関根良平 (2018). 連闇構造からみた宮城県石巻市における水産業の「復旧」と「復興」. 東北地理学会編『東日本大震災と地理学』東北地理学会, 115-127.
- 高木彰彦 (2002). グローバルな空間はどうして作られたか. 水岡不二雄編『経済・社会の地理学』有斐閣, 101-128.
- 高野岳彦 (2021). 都市近郊漁村七ヶ浜の産業復興と6次産業化への展開. *季刊地理学*, 73(3), 133-147.
- 高山 真(2016).『〈被爆者〉になる——変容する〈わたし〉のライフストーリー・インタビュー』せりか書房.
- トゥアン, Y. (山本浩訳) (1993).『空間の経験——身体から都市へ』筑摩書房. [Tuan, Y. (1977) *Space and Place: The Perspective of Experience*. Minneapolis: University of Minnesota Press.]
- 中島弘二 (2022). 被災地の復興をめぐる場所の喪失と再構築——瀬尾夏美「二重のまち」を読む. 空間・社会・地理思想, 25, 3-16.
- 中島芽理 (2023). アルコール依存症者の「癒しの場所」——ライフヒストリーにみる社会生活のリズムと場所. *地理学評論*, 96(5), 384-411.
- 中原一步 (2011).『奇跡の災害ボランティア「石巻モデル」』朝日新書.
- 成瀬 厚 (2014). 場所に関する哲学論議——コーラとトボス概念を中心に. *人文地理*, 66(3), 23-42.
- 成瀬 厚・杉山和明・香川雄一 (2007). 日本の地理学における言語資料分析の現状と課題——地理空間における言葉の発散と収束. *地理学評論*, 80(10), 567-590.
- 新沼星織・宮澤 仁 (2012). 東日本大震災における医療機関の津波被害と内陸部医療機関の被災患者受け入れ状況——宮城県南三陸町と登米市の事例. *季刊地理学*, 63(4), 214-226.
- ネグリ, A.・ハート, M. (水嶋一憲・酒井隆史・浜 邦彦・吉田俊実訳) (2003).『〈帝国〉——グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』以文社. [Negri, A., and Hardt, M. (2000). *Empire*. Harvard University Press.]
- 野澤秀樹 (2005). 地理学における空間の思想史. 水内俊夫編『シリーズ人文地理学4 空間の政治地理』朝倉書店, 156-178.
- ハーヴェイ, D. (吉原直樹監訳 和泉浩共訳) (1999).『社会学の思想③ ハーヴェイ ポストモダニティの条件』青木書店. [Harvey, D. (1989). *The Condition of Postmodernity*. Oxford: Basil Blackwell.]
- ハーヴェイ, D. (大屋定晴・森田成也・中村好孝・岩崎明子訳) (2013).『コスマポリタニズム——自由と変革の地理学』作品社. [Harvey, D. (2009). *Cosmopolitanism and the Geographies of Freedom*. Columbia University Press.]
- ハーツホーン, R. (野村正七訳) (1957).『地理学方法論』朝倉書店. [Hartshorne, R. (1939). *The Nature of Geography: A Critical Survey of Current Thought in the Light of the Past*. Pennsylvania: Association Lancaster.]
- 花田里欧子 (2018). 東日本大震災のトラウマの外と後で——「こころのケア」を超えて. 田中雅一・松嶋 健編『トラウマ研究Ⅰ トラウマを生きる』京都大学学術出版会, 137-169.
- ハバード, P. (神谷浩夫訳) (2002). セクシュアリティ, 不道徳, および都市: 赤線地区と街娼の底辺化. 神谷浩夫監訳『ジェンダーの地理学』古今書院, 118-150. [Hubbard, P. (1998). Sexuality, immorality and the city: red-light districts and the marginalisation of female street prostitutes. *Gender, Place and Culture*, 5(1), 51-72.]
- 原口 剛 (2012). 地名をめぐる場所の政治——1970年代と2000年代の「釜ヶ崎」を事例として. *地理学評論*, 85(5), 468-491.
- 藤田結子・北村 文編 (2013).『現代エスノグラフィー——新しいフィールドワークの理論と実践』新曜社.
- 復興庁・宮城県・石巻市 (2015). 石巻市南浜地区復興祈念公園(仮称)基本計画. [https://www.thr.mlit.go.jp/bumon/b06111/kenseibus/memorial\\_park/miyagi/common/file/miyagi\\_kihonkeikakubun.pdf](https://www.thr.mlit.go.jp/bumon/b06111/kenseibus/memorial_park/miyagi/common/file/miyagi_kihonkeikakubun.pdf)
- 松尾容孝 (2014). 今日の人文地理学——Tim Cresswellの近業に沿って. *専修人文論集*, 95, 183-206.
- 松尾容孝 (2015). 今日の人文地理学——Tim Cresswellの近業に沿って(2). *専修人文論集*, 96, 133-163.
- マッサー, D. (篠儀直子訳) (1997). 政治と空間／時間. 10+1, 11, 121-137. [Massey, D. (1993). Politics and Space/Time. In Keith, M., and Pile, S. eds. *Place and the Politics of Identity*. London: Routledge, 141-161.]
- マッサー, D. (富樫幸一・松橋公治監訳) (2000).『空間的分業——イギリス経済社会のリストラクチャリング』古今書院. [Massey, D. (1995). *Spatial Divisions of Labour*; (2ed. ed.). Macmillan.]
- マッサー, D. (加藤政洋訳) (2002). 権力の幾何学と進歩的な場所感覚, 思想, 933, 32-44. [Massey, D. (1993). Power-Geometry and a Progressive Sense of Place, In Bird, J. et al. eds. *Mapping the Futures: Local Cultures, Global Change*. London: Routledge, 59-69.]
- マッサー, D. (森 正人・伊澤高志訳) (2014).『空間のために』月曜社. [Massey, D. (2005). *For Space*. Sage.]
- 松田素二 (2003). フィールド調査法の窮状を超えて. *社会学評論*, 53(4), 499-515.
- 三上 卓・後藤洋三・佐藤誠一 (2012). 東日本大震災における石巻市で亡くなった方の津波襲来時の居場所および行動に関する調査. 土木学会第32回地震工学研究発表会講演論文集, 1-5.
- 水岡不二雄 (2002a). 空間の広がりと, 空間の距離・位置の, 経済への包摂. 水岡不二雄編『経済・社会の地理学』有斐閣, 57-100.
- 水岡不二雄 (2002b). 経済学が忘れてしまった空間. 水岡不二雄

- 編『経済・社会の地理学』有斐閣, 21-56.
- 村田陽平 (2009). 『空間の男性学——ジェンダー地理学の再構築』京都大学出版会.
- 森 正人 (2011). 変わりゆく文化・人間概念と人文地理学. 中俣 均編『空間の文化地理』朝倉書店, 113-140.
- 森 正人 (2014). 訳者解説 ポスト人間中心主義の空間. マッキー, D.著(森 正人・伊澤高志訳)『空間のために』月曜社, 390-401.
- 森 正人 (2021). 『文化地理学講義——〈地理〉の誕生からポスト人間中心主義へ』新曜社.
- 矢ヶ崎太洋 (2017). 津波災害に対する地域社会のレジリエンス  
——宮城県気仙沼市舞根地区における東日本大震災と防災  
集団移転を事例に. 地学雑誌, 126(5), 533-556.
- 矢ヶ崎太洋 (2019). 東日本大震災後の人口減少と地域社会の再  
編——宮城県気仙沼市浦島地区の津波災害とレジリエンス.  
人文地理, 71(4), 371-392.
- 矢ヶ崎太洋 (2021). 東日本大震災の津波災害に伴う自主再建と  
新興住宅地の形成. 人文地理, 73(4), 467-484.
- 矢ヶ崎太洋・吉次 翼 (2014). 岩手県陸前高田市における東日本大震災後の都市復興と住宅再建. 地理空間, 7(2), 221-232.
- 山崎孝史 (2013). 『政治・空間・場所:「政治の地理学」にむけて  
(改訂版)』ナカニシヤ出版.
- 山田浩久 (2018). 被災地における土地利用変更の実態と今後の  
課題——宮城県石巻市を事例にして. 東北地理学会編『東日本大震災と地理学』東北地理学会, 91-102.
- 矢守克也 (2018). 『アクションリサーチ・イン・アクション  
——共同当事者・時間・データ』新曜社.
- 吉田容子 (1996). 欧米におけるフェミニズム地理学の展開. 地理学評論, 69A(4), 242-262.
- 吉見俊哉 (2002). グローバル化と脱一配置される空間. 思想, 933, 45-70.
- リオタール, J. F. (小林康夫訳) (1986). 『ポスト・モダンの条件  
——知・社会・言語ゲーム』水声社. [Lyotard, J. F. (1979). *La condition postmoderne*, Paris: Les éditions de Minuit.]
- レイコフ, G. (池上嘉彦・河上誓作・辻 幸夫・西村義樹・坪井栄治郎・梅原大輔・大森文子・岡田領之訳) (1993). 『認知意味論——言語から見た人間の心』紀伊国屋書店. [Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things—What Categories Reveal about the Mind*. The University of Chicago Press.]
- レルフ, E. (高野岳彦・阿部 隆・石山美也子訳) (1999). 『場所の現象学——没場所性を超えて』筑摩書房. [Relph, E. (1976) *Place and Placelessness*. London: Pion.]
- ローズ, G. (吉田容子ほか訳) (2001). 『フェミニズムと地理学  
——地理学的知の限界』地人書房. [Rose, G. (1993). *Feminism and Geography: The Limits of Geographical Knowledge*. Polity Press.]
- 若松英輔 (2012). 『魂にふれる——大震災と、生きている死者』  
トランスピュー.
- Bergson, H. (1910). *Time and free will. Muirhead Library of Philosophy* (authorized translation by F. L. Pogson). London: George Allen and Unwin.
- Bergson, H. (1911). *Matter and memory* (trans. N. M. Paul and W. S. Palmer). London: George Allen and Unwin.
- Cresswell, T. (2004). *Place: a short introduction*. Blackwell Publishing.
- Davis, M. (2000). *Ecology of fear: Los Angeles and the imagination of disaster*. London: Picador.
- Henderson, G. (2009). Place. In Gregory, D., Johnston, R., Pratt, G., Watts, M. J., and Whatmore, S. eds. *The dictionary of human geography*, 5th ed. Wiley-Blackwell, 539-541.
- Taylor, P. J. (1994). The state as container: territoriality in the modern world-system, *Progress in Human Geography*, 18(2), 151-162.